
真剣で魔神に恋してみる？！

キャップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で魔神に恋してみる?!

【Nコード】

N4895P

【作者名】

キャップ

【あらすじ】

つまらない世界でつまらない人生を諦めた命。

それを神様が『価値のあるもの』だと言う。だが、そうは思わない俺。

人生なんて価値の無いものだと思った俺。それなのに神様がチャンスを与えてくれた。

そして新たな自分、魔神として武道の特化した世界に今、降臨する。

プロローグ（前書き）

どうも初めまして！！

これは自己満足で書いた作品です。不快な描写があったらすみません。

あと処女作です！！・・・だから何？って思ってもスルーで。

プロローグ

この話に登場する主人公の名前は『九条くじょう闘夜とうや』。彼は一度死んでい
る。

彼が生きていた頃……。

闘夜

「はあ、また一日が来た」

彼は、思った……義務教育を受け、それが終われば
高校、大学、就職する。

家族を持って家族為に働き日々を過ごしていく。……皆同じだと。
意味のない事を繰り返しているんだと。

彼は、皆と違い感情や内面が大人に近い、そして
少し特殊な環境で育ったがゆえにこんな思考を持ってしまった。そ
して、この考えの理解者が居ないか無意識のなかで同級生に問いか
けていた。

結果が分かっていた事なのに……。

闘夜

「何もかもがめんどくせえーなー」

彼は、ものすごく孤独感を感じていた・・・。
ふとっ、外にでたくなり闘夜は、夜のなかで歩き回っていると、1
時間が過ぎた。

闘夜

「もお、9時過ぎか」
っとボーっとしてつぶやいていたら・・・ドォーンと鈍い音がした。

闘夜

「（俺は、轢かれたのか）」

車の主

「おい、大丈夫か。すまない今すぐに救急車を・・・」

闘夜

「大丈夫です、ところどころ痛いですがこの位なら」

車の主

「でもボロボロじゃないか」

闘夜

「服だけですよ、少し急いでのので、それでは」

その場から走って遠ざかった。

本当は全然平気でわ無い、後頭部から血が出ていた。

それを抑えてみるが止まらない、それどころかさつきより血が出ている・・・。

しかし闘夜はその事に動じずに平然として木に近づき、背中合わせに座った。

闘夜

「このまま、だと俺・・・死ぬのか。でも何でだろう、まったく怖く無い。

ここにいるよりマシかな」

意識が朦朧として、身体に力が入らなくなった。

ピーっポーピーっポー

サイレンの音である。

先程の人が心配になって捜しに来ていた。

そして闘夜は・・・血が出ていた量が体内の3分の2も出ており助ける術が無かった。少し経つと目が覚める。

闘夜

「ん？ 俺は死んだのか」

そして、神様が言った。

神様

「闘夜、お前の考えは、間違っているよ。
早過ぎるけどもう一度人生をやり直せ。確かにそういう思考
を持ってしまってお前は、生まれる場所を間違いたかもしれないな。」

闘夜はさっき居た世界じゃ無くだらない世界じゃなければ
もう一度やり直したいと思った……。

闘夜

「分かりました。……ありがとうございます。
……でも大丈夫でしょうか？」

神様

「何がだ？」

闘夜

「また、前と同じ末路を辿るということはないでしょうか？」

神様

「それは、わからんよ。自分次第だ。だか記憶は、消しておく。
あとは、全て一緒だ。・・・ただ、闘夜、君は命を粗末に扱った
・・・その代償は受けてもらう」

闘夜

「代償・・・ですか。どう言ったものですか？」

ひきつった顔で聞く。

神様

「君の目に魔神（悪魔）の目を宿す。左の目には複写眼アルファステイグマ右の目には
魔^マ覇^セ眼^キ」

その後、神様は魔神（悪魔）の目について説明はしなかった。
闘夜は、その身を持って体感しなさいと神様が言った様に見えた・・・。

その後、闘夜は思った。

闘夜

「（常人を超えるじゃねえか）」

その後に神様から次に向かう世界について聞いたら納得してしまった・・・。

闘夜

「デタラメな世界だな」

神様

「それでだ。人生をやり直せと言ったが子供からではない」

闘夜

「次はこっちの発言がデタラメだな」

神様

「以前の肉体と一緒にだ。記憶が無くなるのは寝たらだ、そして記憶が消えたと同時に魔眼の扱い方を介入させてもらうからね」

闘夜

「魔眼の扱い方ね、それはどうも・・・っん?! 寝なければ記憶は消えないのですか!？」

神様

「ああ、そうだ。記憶が消えても性格や名前変わらないし魔眼を扱えるという事も記憶にくわえさせてもらう。」

神様

「だが、アルファステイグママセキ複写眼や魔麁眼にこめられている記憶までも入ってしまうかもしれない」

闘夜

「理解はしました」

アルファステイグママセキ複写眼や魔麁眼の記憶の事をあまり考えずそこはながした。

神様

「何か疑問があるのか？」

闘夜

「いえ、無いです」

神様

「そうか、では行くか？」

闘夜

「・・・はい・行きます」

神様

「安心なさい。良い所に降ろします、だからもう行きなさい」

闘夜

「ありがとうございます」

闘夜は光に包まれてゆく、そして段々下へと降り立ってゆく・・・。

プロローグ（後書き）

！！感想お願いします！！

アルファステイグマ

複写眼は伝説の勇者の伝説から取り入れています。

自分的には忠実に再現したいと思ってます・・・けど、あまり詳しくないので完璧ではありませんしたまに自己流が入ります。

1話 魔神降臨（前書き）

それでは本編突入！！

1話 魔神降臨

——川神院——

Side 百代

時刻は夕方になり段々と日が落ちてきた。

鉄心

「百代、マンガばかり読まんと、ちゃんと修行せい」

百代

「うるさいぞ、じじい。ちゃんとノルマはこなした」

鉄心

「百代何だ、その口のききかたわ」

鉄心が百代の頭を叩く。そして師範代のルー・イーが大声を聞きつけて見に来る。

百代

「何する、じじい」

ルー先生

「あーあ、また始まっちゃたネ」

2人が対立する。ルー先生が止めに入る瞬間、2人の間に光の柱が立ち塞がる。

百代

「何だ、これは？」

鉄心

「この光、天まで続いているの」

ルー先生

「一体、これは？」

百代

「光の中に何かいるぞ」

段々と光が薄れてゆく。そして男が現れる・・・。

百代

「誰だ、お前？」

S i d e o u t

百代

闘夜

「段々と地上に近づいていくにつれて外の気温が伝わってくるな」

何となく久しぶりって感じがする闘夜。

闘夜

「よっと。地面だ、少し立ってるだけで疲れるな」

光が薄れてゆく・・・。

美少女

「誰だ、お前？」

闘夜が自分ですかと頭をかしげて指をさす。

闘夜

「俺は九条闘夜だが・・・」

百代

「私は川神百代だ」

と、自己紹介をすると、老人が近づいて来る。

鉄心

「わしは川神鉄心じゃ」

闘夜

「ここは何処ですか？」

と、聞くと間を置いて

百代

「ここは日本だが」

闘夜

「日本か！ここでは武術が凄い世界だと聞いている」

鉄心

「誰からじゃ？」

闘夜

「神からだ」

急に変な目で見られる。

百代

「・・・嘘をつくな」

闘夜は今までの事を話す。

死んでから神様に人生のやり直しなさいと・・・。

鉄心

「ふむ、だいたい分かった。信じがたいがのお」

百代

「ようは、眠らせれば良いんだろ（ニヤリッ）」

鉄心

「やめい、百代」

少し荒い人達だなあと思う闘夜。

鉄心

「で、まだ言いたい事があるんじゃないか？」

そう、鬨夜は神様から行く前に何処かの養子にしてもらいなさいと・
・。

鬨夜

「俺を養子にしてくださいませんか？」

少し重たい空気になり口を開いた。

鉄心

「此処で、いやこの世の中で生きていく気があるのか？」

鬨夜が頷く。そのために此処に来たんだからな。

鉄心

「ならば、今日からお主の名は川神鬨夜じゃ」

鬨夜

「ありがとうございます。あと此処で武道を嗜んでもよろしいです

か？」

鉄心

「よからう」

百代

「でわ、今日からお前は私の弟なわけだ・・・ところで闘夜はいつ寝るんだ？」

百代は嬉しそうに聞く。早く魔眼と言う力が見たいのだった。

鉄心

「百代、部屋に案内してやりなさい」

百代は闘夜を案内する。

闘夜

「と言うか、寝ても良いのかな？」

百代

「いいんじゃないか？ちょっと待ってろ」

瞬きをした瞬間消えた。

闘夜

「・・・居ない?!あれ」

周りをキョロキョロしていると・・・。

百代

「好きにきなさいだって・・・」

闘夜

「っうわ?!ビックリした。あのどうやってその」

ビツクリしたせいか次の言葉が出てこない、と百代が言う。

百代

「ちょっと走っただけだが、まあそんな驚くことでもないだろ」

闘夜

「この世界はデタラメだな」

百代

「で、いつ寝るんだ？」

闘夜

「あーそうだな。心の整理がついたらだな」

百代

「ここが闘夜の部屋だぞ。」

闘夜が入ると百代も一緒に入って来た。

闘夜

「広いな」

歩きながら壁に近ずいてもたれて座ると百代が隣に来る。

闘夜

「・・・どうしたんだ？」

百代

「いつになったら闘夜は寝るんだ？」

嬉しそうに聞く。

闘夜

「あの・・・だからな、心の整理がついたらだって。」

百代の表情がつまらなさそうになった。

百代

「そうか、ところで今年生なんだ？」

闘夜

「高校2年生かな」

百代

「そうか、私と1年違いか」

闘夜

「っん”っゴホン」

こんなに美人の高校生がいるかよ、と思ってしまう。

百代

「どうした？」

闘夜

「いや、なんでも無い」

闘夜は少し考え事をする・・・。

闘夜

「んーもう、そろそろ寝ようかな」

百代の表情が変わる。

百代

「寝るのか?! 傍についていよう」

闘夜

「何してるんだ？」

闘夜が布団に入った後、ずっとこっちを見ている。

百代

「いや、私が見守ってやろうと思って」

闘夜

「なんで？」

聞くまでも無いが・・・。

百代

「力を見たいからな」

闘夜

「信じがたいのは分かるけど信じてよ」

百代

「信じてるからこそだ」

闘夜

「あの・・・別に傍についてなくていいって」

百代

「分かった、明日起きたらすぐ会いに来るからな」

闘夜

「ああ、わかりました。」

「すぐに百代さんに会いに行くよ」

百代

「分かったが、呼び方が堅苦しいなあ」

闘夜

「んじゃ、百代？」

百代

「ああ、それでいい」

闘夜

「それじゃあ、おやすみ百代」

ぎこちなく名前を呼ぶ。

百代

「おやすみ闘夜」

不気味に笑ながら言う部屋から出て行った。

闘夜

「明日から新生活か」

闘夜

「まあいいか」

段々と眠りに落ちていく・・・。

1話 魔神降臨（後書き）

##感想お願いします##

2話 魔神覚醒（前書き）

特
に
な
い
で
す。
。

2話 魔神覚醒

Side.

百代

百代が目を覚ますと・・・。

百代

「ふぁー・・・っあ！」

大きくあくびをすると、昨日の事を思い出し闘夜のところへダッシュで走って行く・・・。そこには鉄心が居た。

鉄心

「お前の事じゃから、闘夜を起こしに来たんじゃろ」

百代

「いいだろ、じじい。昨日ちゃんと闘夜と約束したんだ」

鉄心

「よさんか、もも。闘夜はいろいろあって疲れておる」

言い争いになっている。

Side out. 百代

闘夜が目を覚ますと・・・。

闘夜

「あれ？」

自分の記憶がぼやけている。闘夜は昨日の事を少しと両目の事と何かが。
と、考えていると・・・。

百代

「闘夜ー」

嬉しそうに入って来た、鉄心も一緒に。

鉄心

「どうじゃ？」

闘夜

「何がですか？」

鉄心

「何でもない」

闘夜は何の事かさっぱり分からない。

鉄心

「何か覚えてる事ないかのお」

闘夜

「・・・」覚えてる事？でもここに養子に來た事しか覚えてないです」

百代

「他は全く覚えてないのか？」

闘夜

「あゝ全く覚えてないな」

鉄心

「百代、皆を集めなさい。闘夜を紹介する」

百代

「ああ、分かった」

5分後・・・。

???

「あれ？お姉様何で人を集めてるんですか？」

百代

「おお一子、戻ったか。じじいから話があるからここで待ってろ」

話しかけてきたのは川神一子。百代の義妹だ。

まだ一子は小さい頃、育てのお婆ちゃんが死んで行くところがなく、そこへ

川神院が引き取った。

一子

「分かりましたわ、お姉様」

百代が鉄心のところへ戻る。

鉄心

「お前を今から皆に紹介するからの」

闘夜

「わかりました」

百代がこっちに向かって来る。

百代

「おい、じじい。みんなを集めたぞ」

鉄心

「ん、そうか。じゃ行くぞい」

3人で廊下を歩いてみんなの所へ行く・・・。

鉄心

「皆、揃ったの。わしの隣におる奴は、九条闘夜じゃ」

鉄心

「こやつは、今日から養子に入った。名を改めて川神闘夜じゃ」

説明を進めていった。

話しが終わると・・・。

一子

「あの、お姉様・・・」

百代

「闘夜、この子は川神一子。私の妹だ」

闘夜

「百代って姉妹いたんだ」

一子が近づいてきた・・・。

闘夜

「これから、よろしくな！。えっーと・・・」

一子

「・・・お兄様でいいのかしら？川神一子よ」

お兄様なんて少し堅苦しいなと思うが違和感がなかったからあまりつつこまなかった。

闘夜

「まあいいぜ一子、よろしくな」

一子

「うん、お兄様!!」

百代

「闘夜、お前も一緒にトレーニングするぞ」

闘夜

「分かった」

そして段々とやり遂げ最後の組み手で…

百代

「闘夜、私と手合わせしてくれないか？」

闘夜

「絶対いやだ！！残念ながら、お前と対立するほどの力を持ち合わせていない」

当然の結果だ、さっき鍛錬の間に

修行僧に聞いた話、川神百代は世界最強らしい。

百代

「私と約束しただろ」

闘夜

「いつそんな約束した」

そんな話をしている間にトレーニングの時間が終わった。

S
i
d
e

百代

闘夜と別れて鉄心のもとに行った。

鉄心

「どうしたモモ。闘夜の事か？」

百代

「ああ、外見は変わってなかったが・・・」

鉄心

「気がまるで別人じゃったの」

百代

「最初に会った時とまったく違った」

鉄心

「モモ、見た感じの強さはどうじゃった」

百代

「ああ、それなんだ私が疑問に思っているのわ。そこらの一般の人よりは、

強いがワン子と比べても、程遠い」

2人は、闘夜の強さに疑問をもっていた。

S i d e o u t 百代

闘夜

「しかし、あんま疲れなかったなあ」

汗はかいていたが、息切れなど全くしていない。

闘夜

「んゝ、暇だな」

今日一日何をしようか考えていた。

闘夜

「そーいや、川神院から一歩も出てないな」

という事で外を探索することにした。探索する前に鉄心の爺さんのところに

行くことにした。

行く途中に百代にあったけど、睨まれてしまった。

まだ、さっき組み手の相手をしなかったことに怒っているのだ。

鉄心

「どうしたのじゃ？」

闘夜

「ここに来てから外に出てないと思って、外を探索しに。」

鉄心

「じゃあモモと一緒にいくとよい」

闘夜

「一人で大丈夫です」

当然ながら断った、今一緒に行ったら何されるかわからない。

鉄心

「わかった、気よつけるのじゃぞ」

闘夜

「じゃあ、行ってきます」

はじめて川神院から出た。目的も無く坦々と歩く。
そしたら、いつの間にか河原にいた。

闘夜

「涼しいな、ここで昼寝でもすっかな」

目をつぶると、風に揺れる草の音しかなく静かだったのですぐ眠りに
ついた・・・。

闘夜

「っは?! つい気持ちよくなって寝てしまった」

闘夜

「あゝあ、せっかくこの街の事を知ろうと思ったのに。
また今度でいいか」

それから川神院に戻っていくと鉄心さんが待っていた。

闘夜

「ただいま」

鉄心

「おようやくもっどって来たの。少し心配したぞい」

闘夜

「近くの河原で寝たらつい」

鉄心

「まあよい、なかに入るぞい。話があるからの」

話し？何についてかな、と思いながらついていく。

鉄心

「さっそく、本題に入る。これからどうするのじゃ？」

闘夜

「これからですか。まだ考えてもみなかったです」

鉄心

「まあ当然かの。やっと落ち着いてきた頃だしの」

闘夜が黙って考えていると。

鉄心

「それでじゃ、お主に百代と同じ学校に通ってもらおう。
まだ目的にしろ、夢にしろまったく決まっていなかったのであろう」

闘夜

「はい」

確かにそんなのは、全くない。だいち過去の事も何一つ覚えていない、
がなぜかわからない。

鉄心

「そのためにも何か夢などができた場合でも困らないためじゃ」

鬨夜

「はい、わかりました」

鉄心

「まあその年でもあるから学生生活を送ってもらわんどの」

鉄心

「明後日の学校で詳しいことを話す。地図と制服はそこにあるかならの」

闘夜

「わかりました。それでは・・・」

鉄心

「それとの」

闘夜

「はい?!」

話しに続きがあったのでびっくりした。

鉄心

「お前の眼の事なんじゃが」

闘夜

「それがどうかしたんですか？」

鉄心

「扱いが危険なのか？」

闘夜

「いえ、別に危険でわないですけど暴走してしまうと事態の收拾がつかなくなります」

鉄心

「暴走とな？」

闘夜

「はい、ご存知のとおりこの両目は、別々の力を有しています。
何か説明できないんですけど、何かがいるんですよ、この両目にふ
たつの・・・
いや2人の悪魔が・・・」

鉄心

「そうか」

闘夜

「それではこれで」

鉄心

「うむ、わかった」

そのあと自分の部屋に戻ってゆっくり休むことにした。

2話 魔神覚醒（後書き）

!!感想お願いします!!

3話 魔神（悪魔）とクリスの編入part1（前書き）

久しぶりの投稿です!!

3話 魔神（悪魔）とクリスの編入part1

闘夜

「ふあゝ」

大きなあくびついたあとに少しボツとしていると。
トントンとドアの叩くおとがした。

闘夜

「はーい。あいてるよ」

一子

「お兄様、早くしないと朝のトレーニングに遅れますよ」

一子であつた。

闘夜

「そうか、もうそんな時間か」

ちゃっちゃつと服に着替えて一子と一緒にノルマをこなしていくと百代も乱入してきた。2人がそろったから学校の事を話しておくことにした。

闘夜

「確か、お前たち明日から学校だったよね」

百代

「ああ、そうだが」

闘夜

「俺も明日、学校に編入する」

一子

「ってことは、どのクラスになるんだろ？」

闘夜

「詳しいことは、明日教えてもらうのだが・・・そこまでの道のりが

わからない。いちよう地図はもらったけど不安だからあとで案内してもらえないかな？」

一子

「うん、全然いいわよ！」

百代

「あー私も一緒に行きたいがこの後に百人組み手があるからダメだ」

ということで、百代がついていけなかった。ノルマをおえてから

朝ごはんを食べて一子に案内してもらった。

闘夜

「でっけーなあ、川神学園か」

一子

「ええ、そうよ。ここのね学長はじーちゃんがやっているの」

鬨夜

「川神院の総師範代だけでなく校長もやってるのか」

案内をしてもらったあと川神院に戻って一子と百代と一緒に遊んで一日をおえた。

今日から学校。少しテンパっているせいかわ早く起きてしまった。

部屋を出ると一子がいた。

鬨夜

「おはよ、一子」

一子

「っあ！おはよう、お兄様」

闘夜

「今から、どこに行くんだ？」

一子

「じーちゃんがお姉様を起こしてきてだって」

闘夜

「百代のやつまだ起きてないのか。俺が起こしに行つてやるよ。朝のトレーニング行つてきていいぞ」

一子

「ありがと、お兄様。お姉様に先にいつてるねって・・・」

闘夜

「ああ、伝えておく。じゃあ、学校でね」

一子

「はい、行ってきまーす」

そして、百代の部屋に向かう。

闘夜

「百代のやつ、まだ起きてないのか」

部屋の前についてドアを叩く。

闘夜

「百代、朝だぞ。起きろ」

・・・返事がない。仕方なく部屋の中にお邪魔する。

闘夜

「入るからな」

百代がふとんをかぶったまま、まだ寝ている。

闘夜

「こらこら、起きろ。お前のぶんの朝ごはん食べちゃうぞ」

闘夜

「起きろ、百代」

百代

「わかったよ」

闘夜

「そういや、一子が先に行ってきた」す、だって」

百代

「おお、そうか」

闘夜

「百代も早くしないと遅刻するぞ、じゃあ俺もやる必要があるから

いくぞ」

百代

「ああわかった」

そのあと、闘夜は朝ごはんを食べて、鍛錬に入る。
それが終わったところに百代が学校に行った。

闘夜

「じゃあ、そろそろ行くかな」

S i d e

大和

俺と京とガクト3人で多馬川沿いを歩いていく。

春の日差しの暖かさが心地よい。

大和

「ほかほかの天気だ。この川辺で昼寝したいなあ」

京

「私と？」

大和

「・・・・・・・・1人で」

京

「あと少しだったのに」

大和

「どこが。しつこいぞ」

卓也

「やー」

今日発売の週刊少年誌ジャソプを見ながら歩いてくる男も合流。

京

「おはよう師岡卓也。21F所属趣味ネットや漫画」

卓也

「なんだかえらく説明的だなあ」

京

「モロは影薄いから存在を確認しないと忘れそうで」

卓也

「朝一でひどい事言わないでよ！」

岳人

「こいつつられたから機嫌悪いんだ」

卓也

「・・・ああ、そういうこと」

卓也

「ってか京に影薄いとか言われたくないよ！」

京

「今日もナイスつつこみでよろしい」

千花

「あ、ナオっち、椎名っちおはよー」

前に行く同級生的女子グループから挨拶された。

大和

「おはようー（直江大和なのでナオっち）」

京

「・・・・・・・・」

大和

「・・・おい京挨拶」

京

「ん（会釈）」

卓也

「ナオっちうだってさ。もてるねハハハ」

岳人

「むかつくよな。くっちとか言うなよなあ」

こんな風にだらけた会話をしながら川沿いを4人でぐんぐんと進む。

すると、前方に数十人の人だかりが出来ていた。

大和

「なんでもそこに人が集まってるんだ？」

集団の先に視線を向けるとそこには・・・。

大和

「あああ、なんてこった」

見るからに不良達が集団（12、3人）で1人の女の子をグルリと取り囲んでいた。

しかも男達はバットとか武器も持っているし。

京

「これは朝から大ピンチ」

卓也

「早くとめないと大変な事になっちゃうよコレ」

大和

「やはり流れるには俺が行くのか」

岳人

「つか、お前弟だろ」

大和

「弟っつーか弟分なんだけど・・・まあいいや」

大和が走る瞬間京が腕を掴む。

京

「大和ちよつとまって」

大和

「どうしたんだ？」

よく見ると、先にあの集団の中に突っ走っていく奴がいる。

岳人

「おいおい、先に行かれちゃったな大和」

卓也

「冗談言ってる場合じゃないでしょ、あの人ほんとにやばいって。」

大和

「やはり、行かないとダメか」

集団めがけて大和も走る・・・。

S i d e o u t 大和

闘夜

「やっぱ、外の空気はうまいな」

昨日一子と一緒に道を歩いていく。

闘夜

「もうすぐで、橋に着くんだっけ」

闘夜

「だんだんと制服を着ているやつが増えてくるな」

歩いているうちに何かのイベントがあるかと思うぐらいの人が集まっている。闘夜も気になって集団の中に近づいていく。

闘夜

「いったい、何が始まるんだ？」

百ファン1

「あいつら絶対にモモ先輩に殺されちゃうな」

闘夜

「ん？モモ先輩？」

集団の中に視線をうつすと。

闘夜

「っげ、あそこにいるの百代じゃん」

不良たちに囲まれているのをみて、一目散に駆け寄る。

百代

「おお、闘夜まだ川神院いたんじゃないのか？」

闘夜

「早めに出てきたんだよ。ってか、何したんだ百代」

百代

「いや、急にこいつらが襲ってきたんだ」

不良1

「なんだてめえ、俺たちは川神百代にようがあるんだ」

闘夜

「俺は川神百代の弟だ。もし姉さんを倒したければ、俺に勝ってやらにしろ」

不良2

「まとめてこいつもつぶぞー」

百代

「お前一人で大丈夫か？」

闘夜

「ああ大丈夫」

左眼の複写眼を使うと闇夜の眼が赤くなった。右眼も同調して少し気が流れる。

百代

「なんだ、これは」

この気にきがついたのか、鉄心とルー師範代がかけつける。

ルー師範代

「なんですか、この気は」

鉄心

「これがあやつのか。しかも気が二つとも流れておる」

不良3

「コノヤロ」

一人の不良がバットをもってこっちにくる。

闘夜

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

言葉をはつすると、魔方陣が中心から雷撃を発射した瞬間、バットがあとかたもなく消えた

闘夜

「まだ続けるのか？」

不良4

「うるせえ」

闘夜

「めんどくせえ、求めるは光陣>>>・縛呪」

不良全員捕縛した。

闘夜

「ふう〜やっと終わったよ百代」

百代に視線をむけるとニヤリと笑い近寄ってくる。

百代

「今のは、一体なんだったんだ？すごいな私と勝負しろ」

闘夜

「いや、わけわかんないわら。しかも、恩人に対してそれはないだろ」

鉄心

「そうじゃモモ。お前もそうじゃバカもの、素人相手にド派手に使
いおって」

闘夜

「いで、でも最小限におさえて」

百代

「あれで、最小限なのか？すごいな」

ルー師範代

「さあーさあー早くしないと学校に遅刻しちゃうネ」

鉄心

「またあとでの闘夜」

3話 魔神（悪魔）とクリスの編入part1（後書き）

！！感想よろしくお願いします！！

4話 魔神（悪魔）とクリスの編入part2（前書き）

！！
いよいよ魔神とクリスの編入！！

4話 魔神（悪魔）とクリスの編入 part 2

鉄心の爺さんと別れたあとすぐに百代が駆け寄ってきた。

百代

「闘夜お前と真剣の死合いしたい」

かけよってきたそばからこれだ、当然ながら・・・。

闘夜

「却下だ!!」

百代

「なあー闘夜勝負してくれよ」

闘夜

「ああーもう、ったくいつかな」

適当にながしたが百代の目が真剣だ。

百代

「絶対だぞ!!」

闘夜

「じゃあ、先行くからな、この辺を見ていきたいし」

百代

「一緒にいかないのか？」

闘夜

「いや、遠慮しとく。あっちで誰かが待っているみたいだぞ」

百代

「あー、あれは幼馴染たちだ。お前を紹介してやる、だから来い」

闘夜

「だから、いいって」

百代

「そうか分かった」

S i d e

大和

学校に着いてからあのモモ先輩をたすけた男の話しでもちきりだ。

岳人

「しかしすごかったな」

大和

「ほんとだよな、あの不良たちを簡単にかたずけたもんな」

卓也

「そういえばモモ先輩と仲良くしてたよね」

千花

「あれ、ナオっちたちもその話ししてるんだ。結構イケメンだったな」

大和

「あーそうだな、そういううちの制服きてたよな」

卓也

「ってことは、2人編入してくるのかな？」

岳人

「でも梅先生は1人っていったぞ？」

とみんなで考えていると風間ファミリーのリーダー、キャップがはいってきた。

翔一

「おうゝ大和。何の話しをしてるんだ？」

大和

「いやねゝ今日ね（説明中・・・）ってことがあったんだよ」

翔一

「なあに、俺がいないあいだにそんなことがあったのか。ズルいぞゝ大和」

大和

「姉さんともなががいいなら、ワン子ともながいいんじゃないか？」

岳人

「おおゝそれは、あるなあとでワン子に聞いてみるか」

ちょうどその瞬間。

一子

「おっはよー」

大和

「っお、ちょうどいいところにきたな」

一子

「っえ、なにになに？」

大和

「今日の朝なあ（説明中・・・）があったんだ」

一子

「んゝ多分それねえゝ・・・」

育郎

「おゝいみんな鬼小島がきたぞゝ」

あわててみんなが指定位置にもどる。
・・・・・そして朝のHRは、いつもより早めに始まった・・・
・・。

梅子

「それでは、お待ちかね。転入生を紹介しよう」

ざわ・・・・・ざわ・・・・・。

梅子

「と、そのまえにみんな。リ्यूベックから転入生は知っているな。実は追加でもう一人転入することが決まった」

大和が手をあげた。

梅子

「挙手を認める。」

大和

「リ्यूベックからですか」

梅子

「いや、ちがう。詳しいことは聞いてない」

梅子

「それでは、入りましたえ」

ガラガラッ！

転入生？

「グーテン・モルゲン」

ざわ、ざわ、ざわ、ざわ、ざわ、ざわっ！！

一子

「え？あ、あの人が転入生だっていうの？」

一子

「ちょっとふけてる感じがないかしら？」

岳人

「そこが問題じゃねーよ！！」

梅子

「勘違いをしないよう。この方は転入生の保護者だ」

梅子

「――あの、ご息女は？」

転入生父

「ご安心を。時間には正確な娘です」

転入生父

「間もなく駆けて参るでしょ」

オジサンが指をさした先、窓に視線が集中する。

転入生父

「グラウンドをしてみるがいい」

大和

「・・・・・・？げっ!？」

岳人

「どうした大和、何が見えるんだ？」

大和

「女の子が学校に乗り込んできた」

岳人

「なんだそりゃ!!」

梅子

「なんかあるらしいな。よし見たい者は見て良し」

皆が窓の方にザワザワと群がってきた。

卓也

「うん、確かに乗り込んできたねえ」

卓也

「馬で」

クリス

「クリスティアーネ・フリードリヒ!!」

クリス

「ドイツ・リユーベックより推参!!」

馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。

岳人

「超・当たり前なんですけどおおおお!!!!!!」

乗り込んできた美少女を目にした男子たちが騒いでいる。

翔一

「だっはっはっはっ馬かよ!面白えあいつ面白え」

クリス父

「日本では馬は交通手段だろう」

千花

「や、あの、道路とか見ましたよね?」

クリス父

「自動車が多かった。だがTVでは馬走っていた」

千花

「それ時代劇だと思うんですけど」

クリス父

「おお、あれはまさか……………」

千花

「?うわ!! よりによって例外が……………」

クリス

「ここが今日から自分の学び舎か」

クリス

「自分の他に馬登校はいないのだろうか?」

英雄

「フハハ！転入生が朝から馬で登校とはやるな！」

あずみ

「おはようございますっ☆」

クリス

「それは…………ジンリキシャ！」

英雄

「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄である」

クリス

「自分はクリス！馬上にてご免」

英雄

「我が名は九鬼英雄！いずれ世界を統べる者だ！」

英雄

「この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！！！！」

クリス

「おお、まるで遠山！」

クリス父

「人力車で登校する生徒もいるとは」

クリス父

「さすがはサムライの国ですな。ハハハ」

クラスの連中があんぐりとしていた。

京

「大和・・・・・・・・この人達ってもしかして」

大和

「ああ……『日本を勘違いしている外国人』だ」

千花

「あれってさっき話してた男の人だ!!」

またみんなが視線をむける。

卓也

「ほんとだね」

大和

「姉さんと仲良くしていた人だ」

岳人

「おいおい、学長まで出てきたぞ!!」

一子

「あ！あれお兄様だ！！」

皆

「「「「え？・・・えええええ」」」」

皆が驚愕していた・・・

Side out 大和

少し進み橋の上で景色を堪能していたら、パカラッパカラッパカラッ。
ッ。

闘夜

「ん？何だ・・・馬あああああ？！」

後ろを振り向いた瞬間、馬が過ぎ去っていた。

闘夜

「なんだあれは？時代劇の撮影か何かか？」

考えるのがめんどくさくなりほっておいたら・・・。

闘夜

「ここが川神学園。入るのは、初めてだな。「フハハハハ」・・・」

闘夜は声ができる方を見るとメイドが人力車をひいて自転車並みのスピードで通り過ぎ去っていく。

闘夜

「（無視）しかし、ここはほんとでかいよな」

闘夜がゆっくり進むとさっきのメイド人力車と馬の人が何か会話をしているのが見えた。

闘夜

「あいつらが行ってからはいろ」

めんどくさいのでさっきの人達が行ったら行くらしい。

闘夜

「校舎もホントでけえ、ん？よく見ると、一子がいるな・・・あと
変な殺氣が」

さっきのめんどくさい連中がいなくなったら鉄心の爺さんが出てきた。

鉄心

「なにをやつとる、闘夜」

闘夜

「いや、何かさっき変な人達がいたから入りにくくて・・・」

鉄心

「まあよい、いくぞ」

校舎のなかに入っていく。どうやらそのままクラスに向かうらしい。

闘夜

「俺のクラスって、もう決まったの？」

鉄心

「ああ、一子と一緒にのクラスにしておいたわい。身内がおるから安心できるじゃろ」

そして、ろうかを歩いていたら、遠くからドアをあけて軍服のおっさんが出てくるのが見えた。

軍服のおっさん

「クリス、何かあればすぐ戦闘機でかけつけるからな」

と言ってでてきた。

闘夜

「爺さん・・・あの人なに？」

鉄心

「まあ細かいこと気にせんでいい」

いや、全然細かくないし。

鉄心

「ここがお前のクラスじゃ」

さっきおっさんが出てきたクラスである。鉄心の爺さんが扉をたたく。

鞭を持った先生であろう人が出てきた。

鉄心

「こやつが朝ゆっておったこじゃ」

先生

「わかりました。学長あとは引き受けます」

梅子

「私はこの2－Fの担任を務める小島梅子だ」

闘夜

「川神闘夜です」

自己紹介が済むとここで待つようにいわれた。

梅子

「今、もう一人の転入生が着いた」

一子

「きつと、お兄様ねえ」

梅子

「入りたまえ」

闘夜が入ると女子たちがキャーキャーと叫ぶ。

黒板にクリスティアーネとかいてある隣に川神闘夜と書く。

闘夜

「川神闘夜です。これからよろしくお願いします」

というと一子が抱きついてきた。

一子

「お兄様」

梅子

「川神控えろ。」

というと一子が悲しいかおで離れて行った。

梅子

「よし、何か質問があれば挙手していけ」

どうやらクリスの質問が終わったため闘夜に質問が殺到した。

大和

「あの一子のお兄さんって本当ですか？」

闘夜

「ああ、そうだ」

そんなような質問が続いた。一通り質問が終わると最後に・・・

一子

「はーい質問！何か武道やってるのかしら」

クリス

「フェンシングを小さい頃よりずっと」

一子

「YES!! 梅先生提案!」

ワン子が身軽に立ち上がった。

一子

「転人生を、歓迎、してあげたいと思いますーす」

クラスが、歓迎、の意味を悟り騒然とする。

梅子

「ふふっ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い」

梅子

「クリス。そのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

クリス

「!!」

クリス

「――なるほど。新入りの歓迎、か」

一子

「川神学園には決闘っていう儀式があるの」

一子

「決闘の意志を伝え、自分のワッペンを机に置く」

一子

「クリス！戦闘で勝負よ！」

クリスがワッペンをその上に重ねる。

4話 魔神（悪魔）とクリスの編入part2（後書き）

！！感想お願いします！！

5話 魔神、川神学園へ(前書き)

！！
ワン子とクリスの決闘です！！

5話 魔神、川神学園へ

育郎

「おおっ、すげえ！受理したぞ！！！」

岳人

「いいねえ、キツパリしてて気持ちがいいや！」

梅子

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での承認が必要だ」

鉄心

「ほっほっ。小島先生。話は聞かせてもらったぞい」

梅子

「学長。いつの間に……………」

鉄心

「いいよワシの特権です承する。今すぐやんなさい」

鉄心

「ワシが責任持って見届けよう」

クラス中が大騒ぎとなった。

2人は視線で火花を散らせながらグラウンドへ．．．

闘夜

「一子、気よつけるんだぞ」

一子

「うん、私がんばるね」

鉄心

「闘夜、何をしておる。ゆくぞ」

闘夜

「ああ、わかった」

翔一

「決闘トトカルチョ！どっちに勝つ張ってくれ」

キャップは稼ぎに走っていた。

翔一

「大和、京手伝えYO！人手が足りないぞう」

大和

「1割だぞ」

京

「1割ダゾ」

翔一

「お前等キャップの命令は無条件で従えとあれほど」

翔一

「なんて言ってる場合じゃねえ！」

アナウンス

「今より第1グラウンドで、決闘が行われます」

アナウンス

「内容は武器有りの戦闘。見学希望者は第1グラ……」

グラウンドに見物人達が集まってくる。

本人達に希望があれば見学不可にでも出来るが。

他のクラスや違う学年の連中も面白がって集まってくるのでお祭り状態だ。

鉄心

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う」

観客A

「決闘の儀！決闘の儀だ！！！」

観客B

「いいぞー、やれー！！！！！！！」

鉄心

「2人とも、前へ出て名乗りをあげるが良い！」

一子

「2年F組 川神一子！」

千花

「ワン子頑張れー！！！！！！！」

岳人

「大和撫子の力を見せてやれ！！！」

クリス

「今日より2年F組！クリスティアーネ・フリードリヒ！」

翔一

「期待してるぞ新入りーっ！っ！」

鉄心

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可をする」

鉄心

「勝負がつくまでは、何があっても止めぬが、勝負がついたにも関わらず攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう、良いな？」

一子

「承知したわ！」

クリス

「承った」

岳人

「ん、スカートで闘うんだよなクリスマスちゃんは・・・」

岳人

「ってことはおい！ ヨンパチいいっつー！」

育郎

「分かってる。シャッターチャンスは逃がさねえ！
出世の機会は逃してもこれだけは逃さねえ！」

鉄心

「いざ尋常に、はじめいっ！……！！……！！……！！」

クリス

「勝負っ！」

一子

「いっけええええー！！！！！！」

クリスと一子の決闘がはじまった。

大和

「転入してきたクリスすごいな。一子の猛攻を避けてる」

百代

「あーあそうだな。転入生の目が慣れてきたな。仕掛けてくるぞ」

大和

「そういや、今日もう一人転入してきたよ。川神闘夜・・・」

百代

「あー闘夜か」

大和

「この休みの間に何があったの？」

百代

「まあ細かいことは、金曜集会にでも話すさ」

百代

「っお！ちょうどあそこに闘夜がいるじゃないか。
おーい闘夜こっちこいよ」

闘夜

「どうしたんだ？」

大和

「あ、どうも直江大和です」

闘夜

「ああ、どうも闘夜だ。改めてよろしく」

大和

「うん、よろしく」

百代

「堅苦し挨拶は済んだのか？でな闘夜この勝負どっちが勝つと思う？」

闘夜

「うーん、わからん。」

百代

「真剣に言っているのか」

そんな話しをしていると、キャップがこっちに来た。

翔一

「おお、闘夜ってったっけ。お前も賭けやらないか？」

闘夜

「いや、やらねえ」

翔一

「大和、そういや闘夜だったのか？」

大和

「何がだ？」

翔一

「朝の登校中に不良たちを簡単に倒したのやつ、闘夜だったのか？」

大和

「そうらしい」

翔一

「いいことを思いついた」

大和

「なんだ？」

翔一

「あのな（・・・説明中）」

大和

「また、ひと儲け出来るな」

百代

「おい違うぞワン子。そうじゃないだろー」

一子

「川神流」

薙刀を大きく頭上に振り上げるワン子。

そのまま頭へ強烈な振り下ろしが行くと思えば――。。

一子

「山崩し！」

薙刀の刃筋は、予想を覆し斜めに流れていき――
クリスの‘脚‘へと振り下ろされた。

クリス

「!!!!」

フェンシングの有効部分は胴だけであり、薙刀は脚すらも攻撃できる。

脚への攻撃に慣れない人間ならば間違いなく、この‘すね技‘を食らってしまうハズである。

一子はこの思考が、間違っているわけではない。

クリス

「ふ！」

ただ1つの誤算は――

一子

「避け・・・!?!」

クリス

「セエイ!!!!!!!!!!!!!!」

一子

「ぐあっ!!」

——フェンシングには全身有効な
種目があり、クリスはソレが専門だったということ。

クリスの突きがワン子の肩に炸裂していた。

一子

「~~~~っっっ!!!!」

悔しさと痛みでうめくワン子

鉄心

「それまで！ 勝者クリス！！！」

観客C

「ウォースゲー！ スゲー試合だった！！」

観客D

「何が起こったのか分からんがとにかくスゲー！」

見ていたギャラリーがドツと歓声が沸き上がる。

千花

「ワン子が……………負けた……………」

千花

「ってわりと良くあることだったわね」

真与

「喧嘩ふっかけてはまけてますもんね」

百代

「足りない頭使い過ぎなんだよ。もつと本能で戦え」

岳人

「うあ、ありゃ鎖骨イったんじゃねーか？」

突かれた所を苦しそうにおさえるワン子・・・・・・・・。

大和

「とか冷静に思ってる場合じゃない。大丈・・・」

闘夜

「大丈夫か？一子」

鉄心

「フム骨は大丈夫じゃな。しばらく痕は残るがの」

クリス

「それは良かった」

翔一

「なあ皆、聞いてくれ。次は闘夜を歓迎しようぜえええ!!!」

岳人

「おお、それはいいな。このまま決勝戦ってことで」

闘夜

「俺の意志は無視か？」

百代

「まあいいじゃないか。クラスの皆が歓迎したがってんだから」

翔一

「クリスはどうだ？」

一子

「ちょっと待ちなさい。

面白いわねクリス・・・・・・・・本気でやろーうじゃない！」

ワン子が装備していたリストバンドを外す。

それはズンッ、という音を立てて地面に落ちた。

観客E

「な・・・・・・・・あのリストバンド何キロあるんだ？」

観客F

「今まであんなハンデで闘っていたということか！？」

一子

「さあ。第2Rといきましょう・・・・・・・・」

鉄心

「あほっ！　すでに勝負あったわ！　（ぽかっ）」

一子

「あ痛っ・・・・・・・・・・じーちゃん何すんだよお・・・・・・・・・・」

鉄心

「フェンシングも全身に攻撃が有効な種目がある。
ワン子お前これ知らなかったじゃろ」

一子

「一番メジャーな種類しか知らなかったわ・・・・・・・・・・」

一子

「てなわけで、負けには仕方のない理由があるの！！」

闘夜

「理由があるうがなからろうが負けは負けだぞ一子」

一子

「ううう。二戦目はおわずけにするわ」

一子

「・・・・・・・・ま！ それは置いといて」

一子

「やるわね・・・・・・・・アタシ達は、アンタを歓迎するわ」

クリス

「・・・・・・・・！」

千花

「強かったんだね！　すごいすごい！」

真与

「健闘をたたえて拍手ですー。ぱちぱち」

忠勝

「骨のあるやつだ」

翔一

「カッコ良かったぞー！」

一子

「よろしくね」

闘夜

「おい一子。一応保健室いっとくぞ」

一子

「うん！わかったわ」

と、いうと素直についてくる。

ルー師範代

「闘夜ボクが連れていくネ。君のクラスメイトがまだ何か

したがっているみたいだからネ」

翔一

「なあ、クリス転入生どうしの親睦を深めるとおもって
もう一戦やらないか」

バンダナをしているやつを見たら、勝手に話をすすめている。

クリス

「私がかまわないぞ」

翔一

「ってなわけで・・・」

闘夜

「俺はやらないからな」

翔一

「えー親睦を深めると思っ

闘夜

「わかった。そのかわり条件付き」

翔一

「その条件はなんなんだ？」

闘夜

「3分以内の勝負だ」

その条件をあっさりとのみこみ次の勝負が開始される。

鉄心

「次は闘夜か、まあよかろう。」

鉄心

「ルール説明じゃ。さっき闘夜が提案した3分ルール、その3分をこえてなお

勝負がつづけられていた場合、両者を敗者とみなす。
よいな、あとはその事を除けばさっきのルールといっしょじゃ」

鉄心

「では2人とも前へで名前を」

クリス

「クリスティアーネ・フリードリヒ」

闘夜

「川神闘夜だ」

鉄心

「では、いざ尋常にはじめいっっ！……！！」

クリス

「先攻は私がいかせてもらう」

そうゆうと突きの猛攻をくりだす。

闘夜

「残り3分か・・・」

闘夜

「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

術者の頭上に、不定形な犬のような獣を出現させ、放った。

クリス

「あれは何だ？」

生き物の様に動いて攻撃した。

クリス

「セエイ!!!」

何とかレイピアで防いだがヒビが入ってしまった。

闘夜

「あれを防いだか」

クリス

「あれを何度も受けたら」

闘夜はレイピアの攻撃範囲からさらに遠く離れた。

闘夜

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

魔方陣の中心から、雷撃を発射しクリスのレイピアを粉碎した。威力調節をして武器だけを破壊する程度に放った

闘夜

「まだやるか？」

クリス

「武器を失っただけであきらめるかああ」

さっきの一言でクリスが怒ってしまった。

闘夜

「くっそ。めんどくせえな」

闘夜

「それは全ての波をつかさどりーソニック・ウォーク」

耳を貫くような高音とともに、目には見えない衝撃波を放つ。

クリスや観客一同は耳をふさぐ。が鉄心や百代は気を耳に集中させ防ぐ。

クリス

「くううう」

闘夜

「求めるは光陣＞＞＞・縛呪」

魔方阵から、光の縄を生み出しクリスを捕縛し追撃をかけて攻撃しようとするが・・・。

鉄心

「そこまでじゃ闘夜」

鉄心の爺さんが目の前に現れる。

鉄心

「それまで勝者、川神闘夜！！」

5話 魔神、川神学園へ（後書き）

意外な展開にクリスと闘夜が決闘しました。

闘夜

「誰かのせいだな」

翔一

「俺は風、誰にも予測がつかないぜ」

大和

「一樣、自覚はあるようだ」

翔一

「あゝもう、うるせえー。っあ、そろそろバイトの時間だそれじゃあなみんな」

6話 魔神、風間ファミリーへpart1（前書き）

今日たまたま、みなとそふとのHPにアクセスしたら．．
おっと、続きはまたあとでそれでは本編は入りまゝす。誤字や脱字
などがあつたら報告お願いします！！

6話 魔神、風間ファミリーへpart1

クリスとの決着がつく。

翔一

「ウォ~~~~~すげえーな」

大和

「ああ、改めて見ると迫力あるなー」

一子

「お兄様の決闘は、はじめて見るけどすごいわ」

以前、一子には技を見せたことがある。

百代がクリスめがけて走ってくる。

クリス

「っ？」

百代

「来いお姫様抱っこをしてやろう」

クリス

「な、何をする！」

驚いたクリスが、拳で攻撃するが……

百代

「おゝ鋭い攻撃だ。お前さんは強いなあ」

百代は軽々と手のひらでそれを受け止めた。

クリス

「な？」

簡単に攻撃を止められて驚いた様子。

クリス

「この強さ……貴女が川神百代ですか？」

百代

「ピアチェーレ！そのワン子の姉でもある」

京

「モモ先輩、それイタリア語……」

クリス

「おお……噂は聞いておりました」

クリス

「真剣勝負を繰り返す戦士である、と」

百代

「ああ、戦ってみるか？ 柔道の寝技でっ——」

鉄心の爺さんが、百代の頭を後ろからはたいた。

鉄心

「アホかモモ。ほらほら早う授業に戻れ戻れ」

百代

「じじい………気安く頭殴るな（ジャンプ）」

鉄心

「あつ、モモ！ 学長に殴りかかるなど退学じゃぞ（ジャンプ）」

孫と祖父、2人の間でも戦いがはじまった。

梅子

「この2人は放置。近ずくと竜巻に巻き込まれるぞ」

真与

「それでは皆さん、速やかに教室に帰りましょう」

皆が帰るなか闘夜が2人のケンカを見ているのにきずいた大和。

大和

「早くしないと巻き込まれちゃうぞ」

闘夜

「大丈夫、こっちに来てみる」

俺はそうゆうと大和を結界で覆った。

大和

「風がピタリとやんだ」

ルー師範代

「それは気で覆っているからだネ」

と、いきなりでてくる。

闘夜

「一子は大丈夫でしたか？」

ルー師範代

「打撲程度で済んだネ」

闘夜

「それならよかった」

と話していると2人のケンカはさらにましていく。

大和

「そろそろ、とめたほうがいいんじゃないですか？」

姉さんたちのケンカに呆れて言う。

ルー師範代

「そうだね、このままいくと学校がもたないネ」

ルー師範代が動く前に闘夜が先に動いた。

闘夜

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

闘夜がそういうと、目の前に魔方陣が浮かびあがり中心から雷撃がちょうど鉄心の爺さんと百代の間に放たれた。

闘夜

「そのくらいにしとけよ、百代、鉄爺」

百代

「こいつ生意気な、人が闘っている最中に」

大和

「そうだよ、姉さん。校内にいる生徒が怯えてるよ」

鉄心

「ふむ、ちとやり過ぎたのお」

ルー師範代

「そうだよ百代、しかももうすぐで授業はじまるネ」

そういうと俺と大和はクラスに戻り、あとの事はルー師範代に任せてた。

S i d e 大和

大和

「転入生のおかげで、慌ただしい朝だったな」

翔一

「まあおかげで稼げたんだぜ。ほらよ、きっかり一割」

京

「ん、このお金は秘密基地の拡充にあてよう」

翔一

「俺、今夜はバイト終わってからいくからな」

京

「いつもの、期待してるよキャップ」

翔一

「おう、任せてくれ」

京

「ところであんな危ないところで何やってたの？」

さつき 闘夜と外にいるところを窓から見ていたらい。

翔一

「そうだそうだ、何やってたんだよ」

大和

「闘夜と一緒にケンカを止めてたんだ」

京

「よく無事だったよね」

大和

「そりゃ、ルー師範代もいたし、なんたって闘夜が結界をはってく

れて
たからな。無事でいたわけ」

岳人

「キャップ止めるの大変だったんだからな、俺も行くあの突風の中へ、
とかなんとか言って」

わざわざ、なんで危ないところへ行くこうするのかね。

Side out 大和

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

- もうすぐ帰りのH R。

ワン子はすでに手当てを終え、ピンピンしていた。

一子

「ねえクリ」

クリス

「何だ犬」

ピンピンしすぎて、今もクリスとぶつかっている。

梅子

「待たせたな、HRをはじめるとしよう」

梅子

「クリスと闘夜の事だが、2人の面倒は風間達に任せる」

翔一

「え、俺達？　いースけど」

京

「？　・・・・・・・・なんで？」

梅子

「闘夜は一子の兄弟であるからな。クリスは島津寮に入るからだ」

翔一

「ああ、2階が1部屋空いてるもんな、了解」

大和

「サラッと了解してくれるなあ・・・・・・・・」

岳人

「2階に誰か入るなんて聞いてなかった・・・」

クリス

「今頃、荷物が運び込まれていることだろう」

クリス

「何でも島津寮は、なんと温泉も出るとか！」

クリス

「楽しみだ」

京

「確かに・・・日本を誤解している人には好きそうな場所」

育郎

「いいなあ、クリスマスまで島津寮かよ！」

梅子

「椎名、部屋隣なんだからお前が面倒見ろよ」

クリス

「よろしく（ペコリ）」

京

「・・・」

梅子

「・・・・・・・・・・ではこれで帰りのH Rを終わる」

・・・・・・・・・・放課後。

闘夜

「さーてと、今日は鉄心の爺さんに稽古でもつけてもらおうかな」

ドアを開けると女子の群れができていた。

闘夜

「うわ!？ 何だ？」

群がっていた女子は闇夜を見にきたのであった。

女子A

「うわぁ、かっこいい」

女子B

「転校生、当たり前なんですけどぉ」

と、そこで三人組の人が近ずいて来た。

冬馬

「おやおや、うらやましいですね」

そういうと後方にいる女子が気づいてあっちにも群がる。

女子C

「きゃー、冬馬くんよ」

準

「見慣れない顔だな、こいつが2人目の転入生か」

こっちに話す気配がないので通り過ぎた。

闘夜

「なんだったんだあれは」

S i d e 大和

———
秘密基地
———

大和

「————って事がさっきあったわけなんだぜ!？」

岳人

「はははっ、大和がせこい手使ってるからだ」

京

「失礼な女だね。案内した大和に対して（怒）」

百代

「そういう生真面目そうなのを落とすのが面白い」

百代

「私の美少女パワーでクリスをメロメロにしたいな」

大和

「美少女？ 漢パワーの間違・・・いでっ」

百代

「ふふん、生意気な大和をこねくり回して遊ぶかな」

抱き寄せられたので撃退の呪文を唱える。

大和

「姉さんそろそろ貸した金返してよ」

百代

「Z
Z
Z」

京

「寝たフリする気持ちは分かるけど、私の分もね」

百代

「さてポップコーンでも食べるか」

京

「無視した」

百代

「なーんてな。しっかり金をもってきてるさ!!」

京がお姫様抱っこされた。

京

「助けて大和、寝取られる。狼に食べられる」

大和

「Z
Z
Z」

百代

「都合が悪くなるとああするよう調教してある」

京

「いいな。私も調教したいな、ヌルヌルと」

百代

「では私と一緒に調教するか。ネッチリと」

危機を察知して起きる。

大和

「いきなり俺に矛先が向くからあなどれない」

百代

「む、この強い気と普通な気はワン子とモモロか」

京

「2人きたんだ。相変わらず便利なセキリュティ」

百代

「今2階の階段あたりだな」

建物から周囲2キロにかけて姉さんが気を張っているため侵入者がビルに来ると即座に察知が可能。

一子

「到着ー！ 飲み物買ってきたよー」

卓也

「おー。キャップ以外は皆揃ってるね」

岳人

「もうすぐ来るだろ。モロ何してたんだよ」

卓也

「ヨンパチの画像収集用のPCが重くて調子が悪いって言うから家まで見て来たんだけどさ。常駐ソフトが同時に立ち上がりまくってて、そりゃ重いはずだよ」

卓也

「で、まあメモリ増やすより先にリソース不足を解消しようと不要ファイルとかレジストリーなんかをソフトで消してってデフラグとかかけていって……」

京

「出た。モロの機械語り」

百代

「おい、誰かあれ聞いてやれ。火種のガクトいけ」

岳人

「ヤドカリオタクもいるし、迷惑な存在だぜ」

大和

「ヤドカリの良さが分からないか。なら教えよう。
彼らはキュートに動く。木に登ったり砂に潜ったり。
その、のんびりした感じが慌ただし現代の中では……………」

百代

「2人に増えてしまっただろうが。早く止めろ」

京

「大和は私が引き受ける。例え貞操を失っても止める」

岳人

「大和の貞操が心配だ」

百代

「既に貞操なかったりしてな」

岳人

「そしたら殺す」

京

「盛大に殺す」

一子

「てーそう？　なんのこと？　和菓子的一种かな？」

京

「なんという無垢な存在。まぶしくて見えない」

一子

「お姉様、なんの話なのー？」

百代

「子供はどうやって出来るか……そんな感じだ」

一子

「おおっ！（赤面）エロチかな会話だったんだ」

一子

「アタシそーいうの全然分からなくて……」

一子

「教えて、お姉様」

京

「レズには興味ないね」

岳人

「お前とことんクールよのう」

百代

「いつまで喋ってるんだ舎弟。最後の1人が来たぞ」

大和

「いてっ（↑殴られた） ん・・・？」

原付に音が聞こえた。

大和

「この音は、キャップか」

百代

「ああ。間違いないな。この楽天的な、気、は」

翔一

「ウィースー！」

だだだだだっ!!!

翔一

「お、駆け寄ってくるとは俺になついてるなワン子」

一子

「待っていたわよ晩ご飯!」

予想通り回答だな。

翔一

「あーそっちね。全員揃ってるようだし・・・始めるか」

翔一

「ほれ! 今日の余り分だ。量多いぜーフフン」

キャンプがどんつ、と置いた荷物の中には――

バイトでの収穫物、‘寿司’、がごっそり入っていた。

翔一

「今日はかなり余ったからな。ガンガン食え」

百代

「モモロ寿司来てるぞ、ほらお前は箸使う派だろ」

卓也

「ビデオカードアクセラレータ付けて18万で売れ・・・
あれ、ああキャンプ来てたんだ」

翔一

「食う準備しないと欲しいのなくなっちゃまうぞ」

翔一

「そんじゃ、頂きまーす」

大和・百代・一子・京・岳人・師岡
「」「」「」「頂きまゝす」「」「」

―――
食事中
―――

6話 魔神、風間ファミリーへpart1（後書き）

！！感想お願いしますね！！

で、さっきの続きみなとそふとのHPにアクセスしたらなんと

『真剣で私に恋しなさい！S』という公式HP出来てたんですよ！！

マジこいの続編が出るらしいんですよ！！

そしてマジこいがアニメ化決定らしいです。このことについて皆の感想が聞きたいです。よろしくお願いします！！

7話 魔神、風間ファミリーへpart2（前書き）

早く、発売日来ないかな。でわでわ、本編へ

7話 魔神、風間ファミリーへ part 2

大和

「ふう、食ったな」

翔一

「よしそれじゃ皆が食い終わったところで今日の議題だ」

大和

「あの川神闘夜のことか？」

翔一

「それもそうなんだが、それはあとでモモ先輩に聞くとして・・・
転入生の2人の事だ」

一子

「んー？ クリとお兄様がどうかしたの？」

翔一

「俺たちのグループに入れようかって議題でてたろ」

卓也

「今聞いたよ!」

翔一

「で、俺イイと思うんだけど?」

大和

「というか何故その考えに到達するわけさ?」

翔一

「だって梅先生に頼まれたじゃん」

大和

「面倒見ろとは言われたけどな。確かに」

卓也

「クラスメートとして仲良くするのは当然だけど」

卓也

「それと、金曜集会にまで案内するってことはレベルが違うよ」

翔一

「そんな事は分かってるさ、でもクリスマスと闘夜は逸材だぜ」

翔一

「この女子連中に負けず気が強いし面白いし、闘夜なんて女子連中に負けないぐらい強いしな」

翔一

「俺、気に入ったもん。一緒に遊びてえって思った」

卓也

「それ、もしかして恋？　ラブなんだ？」

翔一

「いや、それとは全然違うなこれは（キツパリ）」

翔一

「で、久しぶりにの新メンバー加入。どう思うよ皆？」

大和

「1人ずつ聞いてみなよ、キャップ」

翔一

「うーし、じゃあまず牢名主のモモ先輩からどうぞ」

百代

「賛成だ。クリスは欲しい。色なん意味で」

大和

「即答ですね」

百代

「いじくれる。色々な意味で。まあ闘夜に関しては皆も気にいると思う、私的には」

百代

「安心しろ大和。“舎弟”はお前以外にとらないからな」

百代

「私の子分は常にお前1人。ここは泣くところだぞ」

大和

「違う意味で涙が出てきそうだ……」

岳人

「俺様賛成。理由は簡単だ。可愛いし骨もあるから。ライバルが増えるのは困るが別に異議はないぞ」

大和

「ちなみに聞くが何のライバル何だ？」

岳人

「イケメンのに決まってるだろが」

大和

「次は・・・ワン子」

岳人

「っておい無視するなよ」

一子

「うーとね、クリはいらん子だと思うよ・・・まあでも」

一子

「いつでも勝負挑める相手が増えるのはいいわね」

一子

「次にお兄様がの事だけど、入ることに賛成だわ。
さっきお姉様が言ってたようにきつと皆もお兄様のこと気に入ると

思うの」

一子

「ただ、2人ともこーいうの好きなのかしらね？」

翔一

「別にいいけど、様子を見て柔軟になってことか？」

一子

「そーね。そんな感じで1つお願いね、ほっほっ」

ワン子は言い終わると、ダンベルを上げ始めた。

翔一

「じゃあ次は。そこで浮かない表情している京」

京

「私は反対」

翔一

「・・・・・・・・あ、やっぱり？」

京

「他人は増やさなくていいよ。いらないそんなもの」

京

「この七人でいられるのが好きなの」

岳人

「ワン子、ジメったキノコを説得しろ」

一子

「なんでアタシなのか、ガクトの生きてる意味ぐらい分からないんだけど？」

大和

「説得フェイズにすら辿り着けなかった模様」

岳人

「壊滅的に使えん馬鹿だな、モロお前はどーよ？」

卓也

「んー。僕も京と同じで反対かな」

卓也

「今更新しいメンバーとか気を使っちゃうよ」

翔一

「えーと今は賛成3に反対2、様子見が1か」

翔一

「大和。お前の様子が重要だ。聞かせてくれよ」

一子

「ふふっ、責任重大ね。やーいやーい！」

大和

「うーん」

一子

「無視しないでよお・・・」

クリスマスと闘夜が俺達のグループに入るのが賛成か反対か。

大和

「俺は・・・」

大和

「2人の加入に賛成する」

京

「むう」

百代

「よしよし。良くできた舎弟だ（頭なでなで）」

京

「・・・大和はクリスの事怒ってたじゃない」

大和

「それで、いつでもカリカリしてるのは違う。やっぱり異国に1人じゃ寂しいだろう」

京

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・」

京

「優しいね、やっぱり」

翔一

「多数決で決めたことは基本そのまま決定だぜ京」

京

「いいよ。大和が賛成なら私も不本意ながら賛成」

卓也

「僕だけワガママも言えないね」

翔一

「じゃ、クリスには声かけるから、モモ先輩」

百代

「ああ、分かった闘夜には私から声をかけておく」

翔一

「まとめると、京なんか不満そうだし……。空気悪くなりそうだったら遠慮なく切るって事で」

京のために、切るとか厳しい言葉言ってくるな……。。

京

「でもな。俺、もっと楽しくなる確信はあるんよ」

翔一

「この数年、新規メンバーなんて俺が言い出したの初めてだろう？ それぐらい面白い奴だぜ闘夜とクリスは」

卓也

「相変わらずズバツと言い切るね」

翔一

「おう、任せとけっつーの。この俺を信じろ」

大和

「うん。なにより2人自信の意志が重要だしな」

翔一

「1個目の議題はこれで完結。次の議題だが・・・」

そういいながらキャップはモモ先輩の方を見る。

百代

「加入メンバーの闘夜のことか」

翔一

「ああそうだ、前々から聞いたかったけどよモモ先輩が
集会の日に話すって言うから」

——説明後——。

岳人

「おいおいそんなのアリかよ」

卓也

「アニメでもそんな話はないよ」

翔一

「おゝすげえーな。やっぱ俺の目に狂いはねえ」

大和

「空から人が降りてくるなんて」

皆が落ち着いたところで次の話題がでた。

一子

「で、明日は何して遊ぼうかしら？　ね？　ね？」

大和

「うーん、そうだな」

翔一

「いい天気らしいぜ。春爛漫だし河原で遊ばね？」

一子

「いいわね大賛成。河原で走り回るのね！」

大和

「ワン子は運動できるなら賛成だろうけど」

京

「私は、それでいいよ。というか何でもいい」

百代

「冬は映画とかビリヤードとかインドアだったからな」

岳人

「バスケットだったら俺様の見せ場だ。ダンク決めるぞ」

卓也

「決まりっぱいね。僕もたまには外で遊ばないとね」

翔一

「じゃ河原に朝9時集合——」

一子

「えー？」

大和

「そりゃ反対意見もでる時刻だわな」

一子

「遅いよ。朝7時とかにしようよ」

卓也

「そっちで反対!？」

大和

「どこのご老人達だよ・・・健康にもほどがあるぞ」

百代

「ワン子。朝練習こなしで行くとなると10時だな」

翔一

「じゃあ10時な。それぐらいテキトーに集まれ」

そんな話をしながらも、夜は更けていった――。

S i d e o u t 大和

土曜日――学校は基本的に休み。

百代と一子に連れられて河原に来ていた。

闘夜

「おはよう、クリス」

クリス

「おはよう、闘夜殿」

闘夜

「いや、殿って普通に闘夜でいいから」

クリス

「了解したぞ」

岳人

「四番、ファースト、島津ーっと（↑打者）」

京

「ガクトか。空振りとりやすい相手かな（↑投手）」

岳人

「ウルア！ 来い京。ヒョロ球を太平洋まで飛ばす」

百代

「結構いい球投げるぞ京は（↑捕手）」

京

「ライトー、レフトー、よろしくねー」

大和

「任せとけー。ズバッと投げろい（↑ライト）」

一子

「どんな球来ても捕るよー（↑レフト）」

遊んでる連中を、見物している闘夜とクリス。

クリス

「野球・・・か」

闘夜

「だな」

翔一

「まあテキトーな投手 対 打者勝負なんだけどな。
俺達はいつもこーやって遊んでるんだ」

京

「それっ、ハンサムには打てないボール！」

岳人

「マジで（空振り）」

京

「1ストライク」

岳人

「ずるいぞ。マジメにやれ京」

京

「断る」

大和

「京ー！ まじめに勝負してあげてー！！」

京

「承る」

岳人

「なんかもうね・・・絶対打ってやるよ」

岳人

「フン！」

京

「あれ、打たれた？」

岳人

「行った！　これが球場だったら文句なくバックスクリーン直撃でHRだろ」

百代

「甘いなガクト。快速の外野を忘れてはいけない」

一子

「はっはー！！！！　ジャンピング、キャー！ツチ！」

大和

「ナイスキャッチアウト！（↑自分は動いていない）」

岳人

「ちよ、あれ入ってる飛距離だろ、ワン子ずりい」

大和

「アウトはアウトだ。見苦しいんだよガクトー」

岳人

「あつ、今のイラッときた。ちよつと打席立て大和」

大和

「いいいいいよー。じゃあガクト投手な」

クリス

「楽しそうだ」

闘夜

「ああ、確かに楽しそうだな」

翔一

「そう思うなら2人共仲間に入れよ」

クリス

「いいのか？」

翔一

「皆で話し合ってOKが出てるんだ。歓迎する」

クリス

「ありがとう」

クリス

「いきなりこんなに友達が増えるとは嬉しいな」

翔一

「闘夜はどんなんだ？」

闘夜

「ああ、これからよろしくな」

卓也

「2人と話ついたよー。入るってー」

岳人

「おう、よろしくなー！！」

百代

「それじゃあ今夜は島津寮でプチ宴だな。川神院から肉を持ってそ
うちに

行くぞ・・・その後は、親睦度を深めるために一緒にお風呂だ！」

京

「2人共、こっちに入るってさー！」

一子

「おー。あっさり加入してきたわねえ」

一子

「クリー！ このグループじゃアタシが先輩。
そこんところよく考えて敬いなさいよー！」

クリス

「犬か・・・やはり何回見ても納得いかないな」

卓也

「・・・ワン子に文句があるわけ？」

クリス

「あ、そうではない。断じて違う。ただ
学長、百代殿、闘夜に比べると、同じ一族とは・・・」

翔一

「ああ、ワン子は養女だから」

クリス

「え!？」

翔一

「ワン子元々孤児だったのを引き取ってもらって。
で、その引き取り手もおばあちゃんだったんで亡くなって。
で、モモ先輩・・・つか川神院が引き取った」

クリス

「そうだったのか・・・」

翔一

「？ 別に悲しい話でもないぜ。ブルーになんなよ」

卓也

「地元の人達は大抵知ってることだしね」

クリス

「そうとも知らず無神経な発言を昨日したんだ。
・・・川神院でお前だけ浮いている・・・と直に言った・・・」

翔一

「ワン子にか？ それはひどいな、いじめっこー」

クリス

「う・・・あ、謝ってくる」

翔一

「冗談だって！ 今更蒸し返すなって！」

卓也

「大丈夫、ワン子、クリスが入る事反対してないし。過程はどうあれ今は家族だしね」

闘夜

「訂正しとくと、クリス。俺も養子だ、ワン子と同じな」

クリス

「そうだったのか・・・」

翔一

「いつまでそんな顔してたんだ。気にすんな」

卓也

「そうだね。僕1塁守ろーつと。1塁ならなんとか」

翔一

「ほら、来いよ、2人共」

闘夜

「いこうぜクリス」

クリス

「・・・ああ」

・・・。

7話 魔神、風間ファミリーへpart2（後書き）

！！感想お願いします！！

8話 魔神とクリスの歓迎会（前書き）

！！誤字や脱字があったら報告お願いします！！

8話 魔神とクリスの歓迎会

一度、川神院に戻り服を着替えていた。

百代

「闘夜、準備出来たか？」

闘夜

「ああ出来たぞ。ところで何でそんなに小声何だ？」

百代

「いいから、いくぞ」

闘夜

「一子いくぞ」

一子

「はい」

3人共川神院出て島津寮にむかった。

闘夜

「百代、何であんな小声だったんだ？」

百代が手に持っている肉を見せながら言う。

百代

「じじいーに見つかると面倒だったからな」

闘夜

「いや、あとで鉄心の爺さんに気づかれるだろ」

呆れて言う。そして一子の方を見ると逆立ちをしていた。

闘夜

「なあ、一子何してるんだ？」

一子

「トレーニングよー!!」

いや、それは見れば大体わかるがそんなことを言われると返しようがない。いろいろツツコムところはあるが・・・気にせずほかっておこう。

百代

「ここが島津寮だ」

闘夜

「おじゃましまーす」

百代と一子は大和を呼びに行った。

闘夜

「キャップ、肉持ってきたぞ」

翔一

「やっと来たか、もう待ちくたびれたぞ。京、炭焼きの用意を頼む」

京

「アイアイサー」

闘夜

「キャップ、どこに洗面所があるんだ？」

翔一

「そこの扉を開けたらすぐだ」

俺は手を洗いに向かった。

闘夜

「よし、居間に戻るか」

洗面所のドアをあけたら、叫び声が聞こえた。

一子

「ぎゃあああああ」

闘夜

「おいおい一子どうしたんだ？」

一子

「大和が・・・大和がエロ本を」

闘夜

「なに、ブツブツ言ってんだ？」

部屋から大和と百代がでてきた。

闘夜

「おい、大和。なんか一子がお前の名前をブツブツ、つぶやいていたぞ」

居間に向かいながら話を聞いていた。

大和

「つまり変な誤解を生んだのは姉さんだ」

皆が席に着いておしゃべりをしていると。

京

「炭焼きの用意できたよー」

百代

「よし、じゃあ始めるか。大和は私の肉を焼け」

大和

「京、姉さんのお肉を焼いて」

京

「こういうのは新入りが焼く」

クリス

「命令の交錯が激しいグループだな」

百代

「舎弟がダメなら闘夜頼む」

闘夜

「自分で焼いて食べろ」

一子

「アタシはひたすらに食べるわね」

翔一

「ゲンさんバイトか。あ、2階の子もここに呼ぶぜ」

百代

「ああ。寮での歓迎会ってやつだし」

京

「キャップ。寮の女子として2階に上がる事を許可」

翔一

「あいよ。呼んでくる。風のように素早くってな！」

大和

「モロはじーさんの世話、ガクトは廻廻の宴だって」

百代

「最高に頭悪そうなネーミングだな。何だそれ」

大和

「俺もなんだか知らんが、はずせないらしい」

ちよつとしたらキャップが戻ってきた、2階の黛と一緒に。

翔一

「お前等だと適当に焼くから俺がやるしかねえ」

翔一

「肉はこうやってな多めに寄せ合って焼くのがいい。
こうすつと、うまみのある肉汁がでも隣の肉にしみこむだろ（↑
レモン一絞り）」

一子

「ごたくはいいわ。キャップはひたすら焼くのよ」

翔一

「うるせーな。焼けたよホラ食え。俺も食う」

一子

「うんっ、美味しいわね、さすがウチへの献上品」

闘夜

「ホント、一子は食ってる時の顔が幸せそうだ」

翔一

「肉もやーらかしし、いい感じだぜ。どう黛」

由紀江

「はいっ、これ、まいうーですね！」

一子

「さー次焼きなさいよキャップ、急いで！」

翔一

「がっつくなくて、しゃーねーなー」

由紀江

「あれ、まいうーがスルーされ気味でしたよ松風」

松風

「状況は悪くない。将棋で言えば歩を1つ進めたよ」

大和

「（またこの1年1人でブツブツ言ってるよ………）」

京

「（む。私の将来の配偶者がつまんなそうだ）」

由紀江

「はっ?! なんだか生温かい視線」

大和と目が合う。

闘夜

「（なあ、大和・・・）」

大和

「（触らぬ神に祟りなしだ、闘夜）」

闘夜

「（・・・わかった）」

由紀江

「やはり携帯ストラップと喋る怖いヤツと思われたのでしょうか、
松風」

松風

「大丈夫。将棋で言えば2歩かましたようなもんだぜ」

由紀江

「それ負けじゃないですかっ！」

百代

「ははっ、なんだなんだこの面白い生き物は」

由紀江

「ふえっ」

百代

「カワユイ……（抱きしめ）」

由紀江

「あぁっ……人の体温の……なんと暖かい事か……」

京

「モモ先輩そっちの肉を食ってどーする！（チラッ）」

大和

「いやそれほど上手いこと言っていないから」

一子

「焼けた？ 焼けたよね？ その肉もらったわ！」

翔一

「まーだ裏側焼けてないだろ、だめ」

一子

「わぁーでも食べたいわ」

大和

「おいワン子、待てというキャップの命令だ」

京

「当然待つよね？」

一子

「何よ大和、アタシと勝負すんの？」

闘夜

「ケンカか、一子。ケンカするなら肉はなしだぞ」

一子

「わ、分かったわよ待つ待つ、大人しくするわ」

翔一

「いい肉なんだからしつか裏側もやかないとな」

翔一

「よし、第二陣が焼けたぞー」

一子

「先鋒お任せあれっ！ 肉もらったわ！」

クリス

「強引なっ、それは既に抜け駆けで軍律違反だ！」

百代

「肉への突撃精神ワイルドでチャーミングだワン子」

大和

「相反する2つの言葉ですね」

百代

「大和もほら、肉食え、ほらほら」

大和

「や、どうも」

百代

「これぐらいの肉はぺろりと食べて力をつけろよ」

百代

「ひ弱すぎる舎弟はご免だからな、ふふふ」

京

「あ、ご飯が炊きあがった！」

一子

「すいませーん。ご飯もう持って持って来ちゃって下さい」

京

「もはや客気分ね。まー別にいいけど、大盛りね」

京がご飯大盛りにして、ワン子に渡す。

クリス

「自分ももらえるだろうか」

京

「白いのがたくさん欲しいですとおねだりして」

クリス

「？ 白いのがたくさん欲しいです」

京

「ワン子といいクリスといい邪気がなさすぎる・・・」

大和

「お前が邪気をハラみすぎるんだよ」

京

「そりゃもう、大和にも鍛えられたから」

しまった、ヤブからつついたらコブラが。

大和

「ところで、闘夜はご飯いらないのか？」

闘夜

「遠慮させてもらう」

百代

「どうした？食べないのか」

闘夜

「訓練がきつかったから、あまり食べ物がのどを通らないんだ」

一子

「ぐもぐも（肉をひたすらに食う）」

闘夜

「それにしても一子はすごいな」

一子

「ごっくん・・・アタシも焼いた方がいいかな？」

翔一

「いいよ。お前は自由に食ってろ。ほら焼けてるぞ」

一子

「うんっ！」

クリス

「甘やかされているな」

一子

「工業地帯の川神と焼き肉は良く合うわよねー。今のアタシは体が製鉄所で胃が溶鉱炉よ」

クリス

「お前は何を言っているんだ」

………こうして歓迎会(?)は過ぎていった。

鬨夜

「じゃあ、今日はこれで帰るよ」

百代

「もう、帰るのか？」

鬨夜

「ああ、もう腹いっぱい眠たいからな」

大和

「そうか、じゃあね」

俺は島津寮を出て家に着いたら鉄心の爺さんが電話を掛けていた。

鉄心

「いやあすまんのお、孫が風呂壊してしまつて」

麗子

「元からボロかったんで気にしないで下さい」

鉄心

「明日正式に詫びにいくからの。うむうむそれでは」

鉄心

「・・・フウ。まったくモモのヤツも困ったもんじゃの」

鉄心

「エネルギーがあり余つとるようだの。危ういのお・・・何とかせねば。

ん？　そこで何をしておる」

闘夜

「いや、話に聞き入っちゃって。百代が風呂壊したって？」

鉄心

「うむ、この頃モモのヤツ、エネルギーをうまく消化できずにおる。ここ最近、好敵手が現れんからの」

そうか、最近つまらない表情をしていたなー。

鉄心

「（そういえば、闘夜の本気をまだ見ておらぬのお。明日、闘夜の本気を
見てみるかの）」

闘夜

「ん？ 鉄心の爺さんどうしたんだ」

鉄心

「闘夜、明日何か予定があるかの」

闘夜

「いや、べつにこれといって。何か用でもあるの？」

鉄心

「明日、お前の力量をはかりたいのじゃ」

闘夜

「俺の力量か・・・まあいいけど」

鉄心

「うむ、では明日やるとしよう。今日はゆっくり休んで明日に備えなさい」

備えなさいって、如何にも過酷になりそうないぐさだな。

俺も自分の限界を知らないからいい機会かもな。実際にまだ右眼の力を

使った事がないからな。

次の日

関東三山の1つ。厄除けの寺院として名高くそれが市の名前になるほど。

『己を高め気力で厄をも救う』という考え方で武道の鍛錬場所として有名。

今日も川神院では多くの修行僧が訓練をしていた。

・・・・・・掃除・・・・・・。

一子

「掃除ー！ 掃除ー！ たー！（ホウキ振り回し）」

修行僧

「か、一子殿、ここのエリアは私の掃除持ち場ですから・・・・・・！」

一子

「こうやってホウキでガーッと掃除していくの、いい運動になるのよね！。

だからつい他の人のトコもやっちゃうのよ！」

修行僧

「おめおめと掃除されるわけにはいきません!」

一子

「おつ、その心意気流石、よし勝負、競争競争!」

修行僧

「また勝負ですね、受けた!」

・・・朝食・・・。

一子

「はいはい。みんなー座禅やめ、ご飯だよご飯。ほら師範代もご飯ですよ」

ルー師範代

「おー、楽しみにしてたね、一子」

ルー・イー。川神院の拳法師範代かつ、川神学園では教師を担当している。

川神百代の両親は今も昔も世界を修行で回っており
師範代は彼が勤めていた。勿論凄まじい強さを持つ。

一子

「今日の朝はご飯と味噌汁納豆焼き魚に卵焼き！」

一子

「アタシは作ってないけど頑張って運んだわ」

修行僧

「今日もボリユーム満点だ！　ありがたや」

ルー師範代

「朝はがつつり食べないと力がでないからネ」

一子

「あまり急いで食べないでねー！ 朝なんだから」

ルー師範代

「おおっと、ワタシも怒られてしまいそうだ」

一子

「梅干しいる人ー、ご飯に置いていくわよ」

一子

「なるべく食べてねこの梅干し。特に食欲増進
疲労回復とかに効いちゃうらしいからさ」

修行僧

「一子殿は食べ物に気を遣いますなあ」

一子

「そういえばそうねエ」

一子

「食べるもので体調が違ってくるなら考えちゃうわ」

ルー師範代

「重要な事だネ」

鉄心

「——うむ。一子は感心感心」

鉄心

「それに比べお前はなんじゃモモ漫画なんぞ読んで」

百代

「うるせーぞじじい。朝の鍛錬はこなした」

鉄心

「風呂壊すだけでなく台所から肉持ってたな」

百代

「友に振る舞ったんだ。いいだろそれくらい」

鉄心

「まあそれはいいが、お前退屈そうじゃのお」

百代

「ああ大和達と遊ぶのは楽しいがそれ以外は退屈だ」

百代

「私に挑戦者はいないのか。試合がしたいぞ」

鉄心

「モモ、お前闘う事ばかりじゃのう・・・・・・・・」

百代

「それが川神家跡取りのあるべき姿だろ」

百代

「だいたい私は定期的に人を倒さないと生きている感じがしないんだよ」

鉄心

「むう・・・・・・」

百代

「じゃあ闘いに備え走りにでも行ってくるかな」

一子

「アタシも行くよ、お姉様。一緒に走ろう！」

百代

「ああで行こうな」

鉄心

「うーむ。妹想いの所いいんじゃがモモめ闘いとられすじゃ」

ルー師範代

「はい、よくない兆候だと思います」

8話 魔神とクリスの歓迎会（後書き）

!!感想お願いしますね!!

9話 魔神の實力（前書き）

誤字や脱字があったら報告お願いします。

9話 魔神の實力

闘夜

「定期的に人を倒さないと生きている感じがしない・・・か・・・」

そう独り言を言うと2人が振り向く。

闘夜

「もう、準備出来たよ」

鉄心

「うむ、そうか、それでは説明をする、用意を頼む」

そういうと、ルー師範代が修行僧を集め、その間に外に移る。

ルー師範代

「用意できました」

鉄心

「うむ、まずここにいる修行僧10人と相手に闘ってもらおう。とりあえず、それだけじゃ」

闘夜

「とりあえずってどういう意味？」

鉄心

「次の闘い用意してあるが、まずこれに勝ってからじゃ」

闘夜

「分かった」

鉄心

「では、はじめろぞい」

修行僧

「闘夜殿、手加減抜きでいかせてもらいます」

鬪夜

「ああ、こちらも真剣にいかせてもらう。人数の差にかかわらずにかかってこい」

鉄心

「準備はよいな、では、はじめええええいいい」

そういうと修行僧が鬪夜を囲んだ。

鬪夜

「これを一気に倒すには・・・」

修行僧

「先攻は先にとらせていただきます」

2人がこちらめがけて走ってくる。

闘夜

「求めるは水雲>>>・崩雨」

魔方陣の中心に、水を圧縮させ、弾けさせることにより激流を生み出して攻撃した。

2人の修行僧がぶつとばされる。

鉄心

「これは闘夜の技が未知数じゃから、闘夜に歩があるの」

ルー師範代

「そーですネ、あんな技は見たことないですからネ」

闘夜

「次で終わらせる」

修行僧

「それはさせません」

闘夜

「求めるは水雲>>>・崩雨——求めるは水雲>>>・崩雨」

連続して魔法を撃ち修行僧全員の足もとには水が流れる。そして
思い切り空に向かって跳んだ。
それを追いかけるように全員が跳んだ。

闘夜

「掛かったな」

闘夜

「求めるは光陣>>>・縛呪」

魔方陣から、光の縄を生み出すしすぐに破られないように長く巻き
つけた。

それを空中で解こうとしたが間に合わずに地面に叩きつけられる。
闘夜も地面に落ちるがもう一度高く跳ぶ。

闘夜

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

魔方陣の中心から、雷撃を発射し水浸しの地面へ電撃を放った。
修行僧が解いた時には、地面に雷撃が放たれて気絶していた。

闘夜

「ふう〜終わった」

鉄心

「勝者、川神闘夜」

ルー師範代

「いや〜凄かったネ」

闘夜

「気絶程度にしといたよ」

鉄心

「んーすごいのおー、まだ全然余力があるようじやの」

鉄心

「次は師範代のルーと闘ってもらう」

闘夜

「お願いします。ルー師範代」

ルー師範代

「こちらこそよろしくネ」

鉄心

「ではこのまま続けてよいな」

闘夜

「ああ、かまわない」

鉄心

「いざ、尋常に、はじめえええい」

ルー師範代

「さあ、こちらからいかせてもらうよ」

いきなりのパンチの猛攻。

闘夜

「畜生、攻撃できねえ」

ルー師範代

「さっきの闘いの威勢はどこにいったんだー」

水浸しの地面を思い出した。

闘夜

「ぐはあ」

闘夜はわざと一発食らい、相手と距離をとった。

闘夜

「ふん、求めるは氷神＞＞・浮凍」

なにかを唱えたことでルー師範代は警戒をとった、がしかし何も起こらない闘夜は何もしない。

闘夜

「どうしたんですか、師範代」

闘夜

「再構築しろ、『浮凍』」

そういうとルー師範代の後ろにだけの水を氷の刃を作り出し放った、がそれに気がつくとそのを対処する。

闘夜

「爆裂しろ、『浮凍』」

そうとうと氷の刃が爆裂し液体に戻った。

闘夜

「再構築しろ、『浮凍』」

そうとうとルー師範代を囲むように氷の刃が向く。

闘夜

「落ちろ、『浮凍』」

指示通りにルー師範代めがけて多くの氷の刃が落ちる。

ルー師範代

「バーストハリケーン」

巨大な竜巻が発生し地面にある水ごと何処かえ消えていった。

闘夜

「流石にすごいですね」

闘夜

「（魔法はまだ全て使っていないが、そろそろ右眼も使って試してやる）」

闘夜

「そろそろ、力を上げていきますよ。ルー師範代」

闘夜

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

脳の抑制を外し、身体能力を一時的に向上させた。
そしてついに片目も赤く染まった。

闘夜

「次はこちらからいかせてもらう」

さっきとは違い殺気立ち冷酷さが見え声のトーンも下がった声が出ていた。

闘夜

「はああああああ」

ルー師範代

「さっきのスピードとまるで違う」

ルー師範代

「川神流大蠍撃ち」

この技が炸裂すれば並の達人なら一撃で倒し、なおかつ普通の生活に支障をきたすほどの障害を残す。

ルー師範代

「とらえた・・・？」

しかし、闘夜は倒れない。鉄心が目を凝らすと闘夜の体を突き抜けている。

闘夜

「あたらない・・・絶対に、この眼は・・・空間を操りし魔眼だ」

というとルー師範代の後ろに立っている。

ルー師範代

「ん?!・・・」

ルー師範代が驚きつつも距離をとる。

闘夜

「距離をとろうと意味がない。ここから拳をくりだせばあたる」

そういうと闘夜はかまえた、2人の距離は約20メートル離れている。

ルー師範代

「川神流・・・ぐはあ」

闘夜は空間を通してルー師範代の腹部にあて地面に倒れこんだ。

鉄心

「勝者、川神闘夜」

鉄心

「（こやつ、ここまで強いとは）」

闘夜

「疲れた」

鉄心

「うむ、ではもう休んでよいぞい」

鉄心

「（ところどころすきがあるがまだまだここやつは強くなるな。しかし闘夜を本気にさせることなく終わったの）」

——時刻は夕方になった。

一子が部屋に入って来た。

一子

「お兄様、今いいかしら？」

闘夜

「どうしたんだ一子」

一子

「今から島津寮で前にやった焼肉のお礼がしたいんだって」

闘夜

「誰がだ？」

一子

「1年生のこだって」

闘夜

「わかった、じゃ行くか」

・・・・・・。

島津寮には、俺達の仲間が全員集まっていた。

由紀江

「お、お口にあえば良いのですが……」

テーブルいっばいに料理がズラッと並んでいた。

大和

「凄い数だねこれ。ハンパないや」

百代

「肉のお返しとは粹な真似を、ありがたく食べるぞ」

闘夜

「ああ、どれもうまそうだな。じゃあ、遠慮なく」

卓也

「なんか料亭の出し物みたいだね、見た目が凄い」

岳人

「こりゃあ味も期待できるってもだぜ。食おう！」

一子

「いただきますーす!!」

百代

「おお、美味しいなこの鯛の刺身」

百代

「花造りだっけか？ 見た目も凝ってるな」

卓也

「豪華だね。食材費高かったんじゃない？」

由紀江

「いえいえいえ。これ父上が送ってくれたんです。北陸で育ちまして海産物や農産物が豊富です」

闘夜

「魚うまいもんなあゝ北陸育ちか・・・」

一子

「んまい！栄養バランスもいいよイイヨ。ベリグー！」

京

「もぐもぐ、辛さが致命的に足りないけど、後は10点」

大和

「出ました京の10点印！俺も含めて、皆大満足みたいだぞ」

由紀江

「よ、良かったあ・・・」

百代

「カワイイなあ、先輩がキスしてやろか」

由紀江

「ふえええ？」

大和

「姉さん、闘夜が妬いてるよ」

闘夜

「っん?!」

いきなりの大和の発言にびっくりした。

百代

「んー、闘夜妬いたのか」

闘夜

「や、やめろ・・・抱きつくな」

1年生に迷惑をかけるのもあれなのでということで闘夜に任せた。

百代

「おー、はじめて見るな。闘夜がこんなに顔を真っ赤にするの」

闘夜

「（大和、お前）」

大和

「（悪い、1年生のためだ）」

百代

「もう少しこの表情を楽しみましょう。大丈夫、この表情は誰にも見せん」

闘夜

「いや、そうゆう問題じゃないだろ」

確かにこうやって腕に覆われていれば見られないけど・・・ってそういう問題じゃね。

由紀江

「心行くまで食べてくださいねっ！」

・・・・・・・・・・。

食事も終わり、皆満ち足りた顔をしていた。ゆっくりと熱い緑茶を飲んでいる。

岳人

「ふー、お前うまいんだなあ料理。俺様食い過ぎた」

由紀江

「はい、小さい頃から母上に教えられてまして」

クリス

「日本の食・・・誠に素晴らしい。今日は感謝だ」

クリス

「朝のアクシデントが無ければ最高の1日だった」

大和

「何か嫌なことでもあったのか？」

クリス

「お前・・・っ!!!!」

大和

「おー怖。食後でもすぐに怒るな」

クリス

「く・・・!」

一子

「うつらうつら」

百代

「よく動きよく食べたら、もう眠い・・・か。ふふふ」

卓也

「まさしくワン子だねえ・・・」

京

「何かイタズラしたいなあ・・・耳にBB弾つめようか」

卓也

「それワン子自分でやって病院送りになったでしょ」

翔一

「で、なんか俺達に話があるんだろう後輩」

由紀江

「は、はい・・・！」

翔一

「そういう目してるもんな。何か決意してる」

百代

「不眠症か？ 寝られるようにしてやろうか？」

由紀江

「そ、そ、そーいうのではなくですね」

岳人

「！ そうか、すまねえな」

由紀江

「え？」

岳人

「彼氏が欲しいってなら俺様は年下専門外なんだ」

百代

「いきなり何勘違い発言してるんだよお前バカか」

京

「バカでしょ」

百代

「そうだった、ははは」

岳人

「辛い世の中になってきたな・・・」

一子

「ねむー」

大和

「おい、人の話は聞かないとダメだぞ」

ワン子の目の下に、リップクリームを塗る。

一子

「!？ わ、ちょ、やつ、スースーするっ・・・」

クリス

「容赦ないなお前達は」

大和

「友達だから何を言っても、何をやっても許すのさ」

岳人

「大和わりい。借りた携帯ゲーム、データ消えた」

大和

「ははは、俺の疲労分を賠償してくれればいいよ」

クリス

「おい！ 全然友達な風に見えないぞ！！」

由紀江

「や、やっぱりいいな！」

大和

「何が？」

百代

「私の魅力がか？ また妾が増えるのか」

由紀江

「・・・その空気が、凄く、いいですっ・・・」

由紀江

「あの、あの・・・」

由紀江

「あう・・・」

由紀江

「・・・すうーは・・・よし、言います」

由紀江

「お願いしますっ！！！！（がばっ！）」

百代

「いきなり頭を下げられたぞ」

由紀江

「私も、皆さんの仲間にいらしてくださいっ！！」

皆さんと一緒に遊びたいんです！あの、私、ずっと地元で友達いなくて……」

由紀江

「それで……それで……今度こそ友達をつて思っ
てこっちに出てきて……それでも作れなくて」

由紀江

「そこで、皆さんが楽しそうにされていて……」

由紀江

「私も、仲間に入れたらどんなに楽しいだろうって、だから願
いします

仲間にいらしてください」

由紀江

「私、食事作れます！掃除も自信あります！体力も人並みはありま
す！

だから……だか……ら……私を……」

由紀江

「仲間にいれてはくありませんかっ!!!!」

9話 魔神の實力（後書き）

！！感想お願いします！！

10話 男性軍の危機?! 魔神、大和争奪戦!!! (前書き)

遅れてすいません、受験で遅れました。

時たまこういった事があるのでご容赦くださいね!!!

誤字や脱字があったら報告お願いします。

10話 男性軍の危機?! 魔神、大和争奪戦!!!

一年生・・・黛由紀江は一気にまくしたてた。不器用な言葉だけと想いは伝わってきた。潤んでいるけど、瞳の輝きは真剣そのものだった。

皆が顔を見合わせ、視線で会議する。

卓也

「(どうするの?)」

一子

「(入れてやれば? こんなに頼んでるし)」

京

「(私は反対。これじゃ際限なく人が増える)」

闘夜

「(俺は皆に任せよ)」

翔一

「（とりあえずここは俺に任せてくれ）」

百代

「（ま、顔を立ってやるよ）」

由紀江

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

由紀江は返事を待っている間、緊張で震えていた。

翔一

「黛由紀江さんだったっけ」

由紀江

「は・・・はい！」

翔一

「今のままじゃ、仲間には入れられない」

由紀江

「・・・・・・・・あ」

翔一

「仲間ってのは基本的に対等なもんだろ？土下座みたいな真似して何でもするから入れて！とかで入るもんじゃないよな」

翔一

「普通に『面白そうだから私も入れて』で、いいぜ」

由紀江

「あ・・・・・・・・！」

由紀江

「お、面白そうだから私も入れて下さい！」

翔一

「断る」

由紀江

「はあああうっ!？」

由紀江

「ばたり」

卓也

「鬼かアンタは!」

翔一

「ハハハ冗談だよ。冗談。これから一緒に遊ぼう!」

岳人

「つか、この一年生ショックで気絶してね?」

闘夜

「おい、大丈夫か？」

由紀江

「きゆう・・・」

闘夜

「これりゃダメだな」

百代

「よしでは、人工呼吸&介抱タイム！ 私に任せておけばいい。
ワン子には刺激が強いから目をつぶってアメリカの州の名前でも読
み上げて待っていてくれ！」

一子

「おー。・・・ラスベガス・・・」

大和

「それ州違う」

由紀江

「だ、大丈夫です・・・わずかに意識が飛んでいただけ」

百代

「チッ、持ち直したか。ま、何事もなければそれで何より」

クリス

「言葉だけで長時間気絶するほど腑抜けではないな」

由紀江

「で、では、その・・・私も仲間で・・・いい、いいですね」

翔一

「ああ！　いいぜ！」

由紀江

「嬉しい・・・ありが”　とうござい”　ま”　す”　っ・・・」

翔一

「オーバーだな、そうむやみに泣いちゃだめだぞう」

キャップが京に視線をかえた。

翔一

「しばらく遊んでみて、なんか違うと思ったら顔見知りに戻るって感じでどうだ？それならいいだろ、京」

京

「・・・そうだね。いいよ、まあそこまで言うなら」

卓也

「でもこれ最後だよキャップ。」

翔一

「ああ。メンバー数はこれで男5人、女5人」

翔一

「丁度いいぐらいだろ。もう増やさないさ」

大和

「しかし、また電光石火で決まったな」

翔一

「疾きこと風の如くってな」

由紀江

「な、なにとぞよろしくお願いします!!!!」

大和

「だから表情怖いって」

由紀江

「緊張してしまうと顔がこわばってしまうようでだから私、友達ができないんですね」

闘夜

「多分違うと思うぞ、それ。顔よりもそっちのぶらさげてる物がな」

岳人

「確かに、その持ってるモン、明らかに人を寄せ付けないぞ」

卓也

「僕も日本刀持ち歩く女の子はちよつとね」

翔一

「そうだな。第一印象が怖いんだよな」

大和

「俺たちはある意味慣れてはいるけどね」

仲間内の女性陣が凛々しすぎるので。

由紀江

「父上から授かった、この刀が原因・・・？」

闘夜

「気づかなかったのか？ 周りで持ってるやつなんていないだろうだから普通の人は怖がるんだよ」

クリス

「帯刀など日本ではよくある事ではないのか？」

由紀江

「国から許可頂いています」

百代

「女性新人2人はボケボケだなー。そこも可愛い」

由紀江

「やはり、刀を手放すわけにはいきません……。これは私の魂でもあるんです」

百代

「手放すなどと言わないさ」

百代

「だが年がら年中刀抱えてるのは、やめておけ。

刀は魂。素晴らしい言葉ではあるが所詮例だ、真の魂は体の中に宿っている熱いものだ」

由紀江

「……は、はい、わかりました……。努力します」

百代

「ああ」

翔一

「モモ先輩まゆっち気に入ってるなあ」

由紀江

「ま、まゆっち！」

翔一

「あだ名、ダメ？」

由紀江

「い、いえいえ！　いえいえいえ！　是非！」

大和

「じゃあこれからまゆっちで」

百代

「私はまゆまゆだな。まゆまゆ相当強いだろう？　そこが気に入った」

由紀江

「いえいえ、私などまだまだです！」

百代

「かるーくパンチ連打で攻撃するから避けてみろ」

由紀江

「エッ？」

百代

「問答無用で、そろそろそろそろ」

由紀江

「うわわっ！！（ひよいひよいひよいひよいひよい）」

クリス

「おお！ 美事！」

一子

「ふ、ふーん。なかなかやるじゃないのよ」

京

「全部見えたけど、それを全て避けられたかどうか」

百代

「まゆまゆはクリよりかは、やや弱いって感じかな（――今の状態での感想だな）」

由紀江

「私など、まだまだです・・・」

百代

「薫十一段の娘が何を言っている」

由紀江

「父上をご存じなのですか？」

百代

「国から帯剣許可をもらえた剣聖だろう」

大和

「幻の十一段の娘・・・また大型新人だなあ」

百代

「よし、まゆまゆに私達が自己紹介だ」

百代

「川神百代3年、武器は拳1つ。好きな言葉は誠」

一子

「川神一子2年、武器は薙刀、勇気の勇の字が好き」

クリス

「2年クリスだ。武器はレイピア。義を重んじる」

京

「椎名京2年弓道を少々。好きな言葉は仁・・・女は愛」

由紀江

「1年黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます」

百代

「ん、であのバンダナがキャップ。リーダーだな。いかにも馬鹿そうなの
うなの
がガクト。面倒見がいい」

百代

「いかにも根暗そうなのがモロロ。優しくはある。私の弟分
大和。頭は回る」

百代

「で、最後の1人が私の弟、闘夜。そこそこ強い」

卓也

「うわぁ・・・おざなり。しかも根暗とかさぁ」

岳人

「俺様のタフガイさが強調されてねえ」

翔一

「女の子が強い時代だよなー。男の立場がないぞう」

闘夜

「そこそこだって、言ってくれるよな」

全員武闘派という事に愕然とする男子連中。
・・・俺を除いて。

大和

「あいや待たれい。情けないぞ諸候!!」

翔一

「軍師大和」

大和

「パワーで負けている分、知力で勝負すんだよ」

大和

「男だってそう簡単に負けちゃいられねえや誰もが勇気を忘れちゃいけないんだぜ」

百代

「ほほー。良くいった。こっちに来い」

大和

「え?」

闘夜

「変なことをいうから、せめて男だけの時とかにいえよな」

グイツ、と女子の輪の中心にひきずりこまれていた。

それを俺は優しく見送る。

百代

「彼が、私達女子を調子に乗らせるなだと」

クリス

「！ 何という言い草だろうか」

大和

「フ・・・異議あり。その表現には誇張があります」

百代

「却下（バキッ）」

大和

「ぐはっ！？ 理不尽すぎる！ どんな法廷だ」

百代

「法廷ではない。私が牢名主の獄中だと思え」

大和

「無法地帯ですか」

生物は生きて行くには、厳しい環境だ。

京

「これはいじめるべきだね。私に任せて」

百代

「皆でいじくってやろう」

大和

「俺はピンチだが、ピンチの時いつも少年誌的には仲間が来てくれるんだぜ」

闘夜

「しゃーね、じゃ——っん——」

岳人とキャップに口をおさえられた。

翔一

「じゃあな。・・・頑張れ。耐えてくれ」

岳人

「俺様も男としてのプライドを失いたくないからな」

卓也

「さようなら」

百代

「少年誌ではなくここはヤンクアニマルのようだぞ」

京

「クク、性と暴力の都みやこというわけね」

一子

「全員逃亡とか、いい友達を持ったわねえ」

クリス

「情けないな」

翔一

「言ってくれるな・・・」

京

「じゃあ大和を取り返してみる？」

一子

「面白い。大和争奪戦をしようじゃないの」

翔一

「・・・フツ」

翔一

「逃げようぜ皆
（スゴスゴ）」

俺はキャップ達に口をおさえられて去っていった。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

鬪夜

「はーはー。殺す気か」

翔一

「油断させるんだよ」

翔一

「あのままでは大和が男の尊厳を破壊されてしまう」

卓也

「助けようよ。そうしないと根に持ちそうだし」

岳人

「異議なし。俺様の力がようやく発揮されるな」

闘夜

「それはない」

岳人

「それはどういういみコラー」

闘夜

「誤解するな、俺1人で行くよ」

卓也

「いくらなんでも1人じゃ」

翔一

「かてるのか？」

闘夜

「それは、わからんけど、あそこまで言われたら黙っちゃいられんな」

・・・。

百代

「さて、大和をどういじくってやろうか・・・」

京

「椎名京！ 一番槍、もらいうけるっ」

闘夜

「そこまでだ」

百代

「1人か・・・ふん」

闘夜

「交渉しに来た」

百代

「交渉など無駄だ」

大和

「早く助けてくれ」

闘夜

「無駄だったら実力行使だな」

百代

「ほっほーいうなー。皆、鬨夜が大和取り返しに来たって」

京

「本当に来るなんてね・・・クックク」

京以外が俺に向かってとびかかって来た。

鬨夜

「おっと」

避けた・・・と思ったら、ムニ。

百代

「私から逃げられると思ったか」

大和

「赤面してないで助けろー」

百代

「やはり、闘夜のこの表情はかわいいな」

闘夜

「うるさい、手を放せ」

百代

「放さんぞ、もっとこの表情を楽しんでいたいからな」

闘夜

「ったく」

そういうと仕方なく空間を使い大和のもとに移動した。

百代

「?! なんだ今のは？」

闘夜

「大和、いくぞ」

京

「そうはさせな・・・い!？」

闘夜

「キャップ、取り返したぞ」

翔一

「おーすげえーな」

卓也

「わ、どうやってあんな無法地帯から救出したの」

闘夜

「まあいろいろな」

岳人

「なかなか、やるじゃねか」

闘夜

「そうもいつてられないぜ、おでました」

女性陣が大和をまた取り返しにきた。

京

「大和をかえせー」

翔一

「皆、ここからは各自解散、逃げるんだ。健闘を祈る」

卓也

「そんな、急に」

———帰り道。

闘夜

「何とか皆逃げ切ったかな」

後ろから人が息を吹きかけてきた。

百代

「捕まえた」

闘夜

「いい加減に見つけるたびに抱きつかなくていいって」

百代

「おもしろいからずっとこうしていようかな」

顔が接近する事で、女の子の甘い匂いが・・・。

化粧とかしてない分、生のフェロモンというか、クラクラしそうだった。

百代

「ユニークな新人が加入したし・・・」

百代

「これから先、もっと面白くなるといいなあ」

闘夜

「俺が入ったからには百代に退屈はさせないよ」

百代

「言ってくれるな。まあ期待してるぞ」

そう言って百代は、夜空を見上げている。俺を抱く力が強くなった気がした。

闘夜

「ほら」

俺はそういうと膝について背中をむける。

百代

「何だ？」

闘夜

「今日は疲れたろ。眠たそうだしおぶってやるよ」

眠たいせいか素直に乗った。

闘夜

「だからって強くつかまるのはやめてくれ」

百代

「闘夜の表情は変わらず新鮮だな」

闘夜

「新鮮もなにも・・・可愛いお前みたいなのに抱きつかれたら
誰も同じ反応するだろ」

百代

「・・・そ、そうか」

2人共帰り道に無言になってしまった。

――川神院。

闘夜

「じゃあ、おやすみ」

百代

「あ、ああ、おやすみ」

Side 百代

百代

「（胸の高まりがおさまらん）」

百代が部屋を出るとルー師範代がいた。包帯でぐるぐる巻きにされて。

百代

「師範代、どうしたですか？」

ルー師範代

「あれ、聞いていなかったのかネ。今日、闘夜くんのを力量を測っていたんだよ」

百代

「闘夜の」

ルー師範代

「そうだね。あれは凄かったネ、ハンパじゃなかったね」

鉄心

「おう、帰っておったか」

百代

「じい、今日、闘夜の力量を測ったって本当か？」

鉄心

「うむ」

百代

「どんな試合になったんだ？」

鉄心

「（・・・説明中）という感じじゃ」

百代

「空間を操る眼か」

ルー師範代

「殺されるかと思ったネ、そんな冷酷さが感じられたネ」

話を聞き終わると部屋に戻る。

百代

「（だからあの時私の手からすり抜けて・・・）」

百代

「本当に退屈させられないようだな」

Side out 百代

10話 男性軍の危機?! 魔神、大和争奪戦!!! (後書き)

!!感想お願いします!!

11話 魔神の決心（前書き）

遅れてすいません。時たま不定期になるのでよろしくお願いします。

11話 魔神の決心

——次の日の朝

普段の様に目を覚ます。

鬨夜

「んゝ、っさ顔でも洗おうかな」

其処でワン子に会った。

一子

「っあ、お兄様おはよー」

鬨夜

「ああ、おはよう」

一子

「あれ、お姉様は起きてないの？」

鬨夜

「そりゃそうだろ、毎朝起こしに行かないと起きないだろ百代は—

――」

其処で昨日の出来事が脳裏によみがえる。

鬨夜

「（どんな顔をして会えばいいんだ?! あゝクソッ、考えてから言えよかった）」

百代

「誰が毎朝起こしに行かないと起きないって〜」

鬨夜

「うわぁ!!」

一子

「おはようお姉様」

百代

「ああ、おはよう」

この一族はいつ何時何処から出て来るか、わからんから侮れん。

闘夜

「お、おはよう」

百代

「おはよう——」

闘夜

「（あれ、あんまりどうじてないのか？　ってあんな恥ずかしい言葉と言ったのは俺か）」

俺が不安に思いながら考え事をしていたのにそんな事よりもつとていような
眼差しをこちらに向けて話してくる。

百代

「昨日、じじいとルー師範代と一緒にお前の実力テストしたらしいな」

闘夜

「ああ、まあ」

一子

「っえ！！　スゴイ！お兄様。いいなあ！私も早くそんな事してもらいたいな」

百代

「それで修行僧10人とルー師範代を倒したって聞いたぞ。やるじゃないか」

百代

「其処で私と——」

先ほどの眼差しが先ほどより眩しさが増す。俺は次に出てくる言葉を聞く前に

闘夜

「っあ、そろそろ朝食だ」

俺はそういうと右眼の魔眼、魔^{マセキ}眼を使ってその場を離脱した。

鉄心

「おはよう闘夜。いきなりなんじゃ、洗面所から」

闘夜

「おはよう、百代が俺と——」

そして俺が言おうとした台詞を百代が代弁してくれるかの様に颯爽と現れる。

百代

「勝負してくれ」

闘夜

「っって言ってくるんだよ」

鉄心

「なんじゃモモ、朝から騒いで」

百代

「昨日の事を聞いて勝負したくなっただ」

闘夜

「だから、今度するって」

百代

「今度とは、何時だ？」

言葉に詰まった瞬間――

鉄心

「いい加減にせんかモモ」

百代

「なんだじじいーやるのか」

大声のおかげで狭まっていた視野が広がり今の現状を理解した。

闘夜

「おい、百代そんな事は、あとででいいからまず」

その言葉で意味を理解した百代は――

百代

「話はまだ終わってないからな」

一子

「はやく、はやくお兄様お姉様お腹空いたわ」

闘夜

「分かった、分かった。待たせたな」

百代

「じゃー食べるか」

―――食後―――

食事も終わり百代が学校の身支度を済ませているところを見計らい

闘夜

「鉄心の爺さんちよつといい？」

鉄心

「なんじゃ」

闘夜

「百代の事なんだけど」

この頃、百代に映る孤独が強くなったのを感じた俺は、今思い描いている事話すにした。

鉄心

「百代がどうしたんじゃ？」

闘夜

「説明中——」

鉄心

「うむ、お前は言い子じゃの。だが百代の欲求解消を行うのならば難しいぞい」

闘夜

「俺が弱いった事でしょ」

鉄心

「わかっておるのならば話が早い。別に弱いとまではいかんが、100%の力が引き出せておらぬ。そして所々すぎが見えた。だが安心せい、お主には無限の力が秘められている」

俺はその話を続けながら鉄心の爺さんと一緒に登校することにした。途中大和達に誘われたが断って話を続けた。

闘夜

「俺は大きな舞台で百代を倒したい」

鉄心

「大きく出たの」

闘夜

「其処なら自分の闘いによる闘志が湧き上がること間違いなはずだ」

闘夜

「でも、その盛大な舞台を何処で行うか？ 何処で行えるか？ が問題」

鉄心

「ふむ、そうじゃの。まあ、その舞台をいつか用意してやろう」

闘夜

「そうか、ありがたいな鉄心の爺さん」

ん？？？そう考えているど一つの疑問が思い浮かぶ。
俺にとって川神百代とは、一体・・・

次第に自分の中で川神百代の存在が大きくなっているのに気づく自分。

いつからだろう？ こんな気持ちを抱いていたのは、、、、
だが百代対して抱くこの気持ちは悪いものじゃないのは確かだ。

鉄心

「ん??」

闘夜

「いったん、この気持ちに気づくと恥ずかしいな」

鉄心

「何を赤面しとるか」

闘夜

「してねえーよ」

やべ、顔に出てたのか。気をつけないとな。

一番の問題は百代に会った時だ。顔に出ないか心配だ。

11話 魔神の決心（後書き）

！！感想よろしくお願いします！！

12話 魔神の初恋（前書き）

更新するのがおそくてすいません。何か誤字や脱字報告お願いしますね。

12話 魔神の初恋

——川神学園——

鉄心の爺さんに別れを告げてクラスの方に足に向けた。

闘夜

「あいつらはまだ来てないのか」

千花

「闘夜くんおはよー。あれ？ 今日1人で登校してきたの？」

闘夜

「ああ、違うよ。今日は鉄心の爺さんに話があったから」

そんなこんなでHRが始まる。

梅子

「伝達事項だ。今週は第1回進路希望調——」

オレは梅先生の話が耳に入らず、ただボーっとしていた。

大和

「どうしたんだ闘夜？」

闘夜

「・・・」

大和

「おい、闘夜くっ！！」

視界の中に大和が現れた。

闘夜

「ん？ どうしたんだ大和」

大和

「どうしたってお前こそどうしたんだよ。さっきから話しかけても返事すらなかったぞ」

闘夜

「おいそっか、悪い。ちよっと考え事をな」

——放課後、教室で皆とまったりしていると。

育郎

「ち、ちくしょう、ちくしょおおーっ！」

ヨンパチが怒りながら教室に入ってきた。

千花

「どうしたのサル」

育郎

「腹が立つことが2つあった」

育郎

「1つは、カワイイ女子のスカートが風でめくれたら中身がスパッ
ツだった」

岳人

「お前は今、泣いていい」

千花

「なんだいつものごとくか・・・心配してソンした」

育郎

「で、もう1つが“賭場”で大負けしちまって・・・」

大和

「今日は賭場開かれてるのか。で、何で負けた」

育郎

「麻雀だ。大和お！ 仇とってくれよ！！」

大和

「勝つ日もあれば負ける日もあるさ。次ガンバ」

育郎

「それがよう、相手が隣の2－Sの女でさあ。
さんさんバカにして勝ちやがって悔しいんだ！！」

千花

「アンタ馬鹿にされる事なんて慣れまくりでしょう」

育郎

「俺達をバカクラスって言いやがってさ！ 見下したんだ優等生だからって！」

闘夜

「なんだ、お前等ってそんなに仲悪いのか？」

卓也

「まあそれがね・・・（説明中）」

闘夜

「いろいろあったんだな。まあ確かに苛々（イライラ）するのは分かる」

千花

「でしょ、でしょー！ー！いつも見下してくるの。ホント苛々する」

育郎

「とりあえず想像の中で服従させたけど腹の虫がおさまりやしねえ！」

千花

「想像の中ってアンタどこまで情けないのよ・・・」

育郎

「カワイイだけに余計ムカツクって言うか」

大和

「ほう。とりあえず見るだけ見てみるか」

卓也

「お、行くんだ。つかカワイイに反応したね」

大和

「京は部活、キャップはバイトか……。モロついてきて。場合に
よっては一緒に打って」

卓也

「僕で大丈夫？ 正直自信ないな」

大和

「何とかなるんじゃない」

大和

「ああ、ついでに闘夜も一緒にきてくれ」

闘夜

「こういうことだ、ついでって」

大和

「いいから、いいから」

賭場は、B棟4階の空き教室で開かれている。

もちろん先生達には秘密で行われてるが・・・、教師達は気付きつつ、黙認している風を感じる。破滅するのは自己責任。人生の勉強、みたいな。

育郎

「大和、あいつだ！ 顔射願望をそそられる奴だ！」

闘夜

「なんもすることがねえ、なら帰るぞ」

魔^マ罫^{セキ}眼^キを使ってその場をすぐに離脱した。

大和

「あ！ おい闘夜！！」

———帰り道。

闘夜

「そんな茶番よりこっちの事の方が先決だ。でも、困ったもんだな」

オレは百代の事について悩んでいた。

Side 大和

大和

「ったく、闘夜の奴。まあ、しょうがないか」

心

「フツ、狙い通り雑魚が雑魚を連れてきたのじゃ」

2—Sには常に着物で登校してる奴がいるって聞いたが・・・こいつか。賭場では新顔だな。
一度やってみるか。

Side out 大和

—————次の日の朝。

一子

「おはよう、お兄様」

闘夜

「ああ、おはよう」

百代

「おはよう、闘夜」

闘夜

「・・・あーまだ寝ぼけてるのかオレ？」

こんな時間に起きてるわけないし。

百代

「私への挨拶は無しか？」

闘夜

「え？ 百代が起きて————」

ガバッ————。がちりロックされてしまった。

百代

「それは、どういふことかな？」

————登校中。

大和

「なあ、闘夜。なんでそんなにボロボロなんだ」

闘夜

「あやまちだ」

大和

「聞くなって事だな。じゃあ、何で姉さんをおぶってんだ」

闘夜

「・・・あやまちだ」

卓也

「それ、どんなあやまち？ってかちよつと闘夜嬉しそうだよね」

闘夜

「あゝっうつせー」

岳人

「っお、顔が赤くなっていくぞ」

百代

「これは朝の仕返しだからな」

闘夜

「もう、じゅーぶんしたじゃん」

いつもの百代だな。昨日は何だかんだ一日会わずにいたから変な感じになると思ったけど大丈夫だな。

なんて話してると橋のたもとは。

弟

「兄者！ あれが川神百代じゃけのお！」

兄

「ウム。噂にたがわず美しい。満点で合格だな」

大和

「今日はゴツイ2人組がいるぞ。挑戦者か」

弟

「川神百代とお見受けするけんのお！」

オレの背中から跳躍すると――――

百代

「そうだが」

兄

「我らは地元では知らぬ者のいない仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

弟

「川神百代。お前俺達と来い。妻になるけんのお！」

闘夜

「っん?!――――」

大和

「どうした? 闘夜」

闘夜

「あいつ等がムカつくだけだ」

大和

「確かにムカつく態度だよな」

京

「ガクトが2人いるみたい。筋肉バカっぽいね」

岳人

「ふん。俺様の方が断然知的にナイスガイだろ」

百代

「純粋な勝負か。嫁探しか。どっちだ」

弟

「勝負なぞしなくても俺達の圧勝だけんのお！」

兄

「嫁探した。俺と弟の相手をする嫁のな。ワハハ」

百代

「ん？ みんな離れろ」

風間ファミリーが一斉に離れる。

大和

「おい、闘夜、姉さんの言ったとお——」

百代

「闘夜から離れろって意味で言ったんだ」

大和

「？
どうして」

百代

「殺気立っているのが分からないか」

大和

「わかるわけじゃないじゃん。あ、でも怒ってるのは分かる」

闘夜

「黙れ。ふざけたことを撤回しろ」

弟

「これは決定したことじゃけのお！」

闘夜

「百代に手を出す事はオレが許さない」

京

「おお、なんていう大胆発言」

岳人

「俺が活躍する場面を!!」

卓也

「あんな台詞が言えるの凄いよね。でも、ガクトがあんなこといったら・・・」

京

「きもちわるい」

岳人

「なんてこというんだよ」

兄

「ああん？ 学生が俺に勝てると・・・・・・・・」

兄

「思ってたのかコラァ!!!!」

弟

「あれ、あいつは」

闘夜

「撤回する気が無いのか」

兄

「後ろ?!」

闘夜

「求めるは焼原>>>紅蓮」

一瞬にして周りが火の海に。

岳人

「これじゃ中の様子が見えねえ」

大和

「おい闘夜。もうその辺にしないと遅刻するぞ」

弟

「兄者」！　　こわいねんのお」

兄

「わかった。許してくれ」

闘夜

「二度とここに現れるな」

闘夜

「求めるは水雲>>>・崩雨」

魔方陣に圧縮された液体が集まり、爆発的な激流を放ち橋の上から川に流した。

大和

「凄い威力だな」

クリス

「気絶しているぞあの兄弟」

百代がボーっとしているのを見て、オレはまたとんでも無いことを言ったことに気づいて恥ずかしくなって登校中、百代と話すことはなかった。

百代

「（私が男だったら誰を嫁にするかな？）」

——と、鬪夜とは裏腹に全くどうでもいい事で悩んでいてボ——としていたらしい。

——学校内——

12話 魔神の初恋（後書き）

！！感想よろしくお願いしますね！！

13話 気になるあいつの好きな人!! (前書き)

もうすぐ夏休み突入でようやく安定して書けると思います!!
誤字や脱字があったら教えてくださいね。笑

13話 気になるあいつの好きな人!!

—————3時間目終了後、休み時間2—F。

羽黒

「あー超最悪。ササクレ剥いたら指超ハレた〜」

千花

「や、指で剥くのアウトでしょ。カットしなよ。それにしてもクリス肌綺麗すぎなんですけど」

クリス

「そうなのだろうか？」

真与

「はい。ツルツルスベスベ真っ白ですよ」

千花

「クリームとか何使ってればそーなるの」

クリス

「あまり意識したことはないな、そこらへんは」

千花

「素でそれなのか。はぁ・・・なんか自信なくすな」

羽黒

「なんかクリスってあたいのライバルになりそう」

千花

「クリス、今の発言は殴っていいところだよ」

クリスはクラスメートとはうまくやっているな。

俺に対しては未だにトゲトゲしい。

闘夜

「何悩んでるんだ？」

大和

「なあ、闘夜・・・着替えとか見られただけで普通怒るかね？」

こいつの視線の先はクリス・・・か。

闘夜

「まあ、男同士だったら全くもって気にしないだろうが、女の子の場合、一般論を立てると・・・お前の想像通りだ」

大和

「だよねー」

闘夜

「でもそれだけが理由じゃないだろう」

大和

「俺とクリスの思想の問題かな」

闘夜

「（今はそっとしておこうか）」

闘夜

「なあ、ワン————」

一子

「1、2、3、4、5、6・・・」

闘夜

「こいつ、こいつで忙しそうだからそっとしておくか」

ワン子はマイペースにダンベルを上げていたので温かく見守ってることに。

——そして、昼休み。

スピーカーから音楽が流れ始める。ラジオか。

闘夜

「どうでもいいや。今日は午後の授業サボるかな!! それじゃ早速」

準

「ハアイエブリバデイ、ケータイの待ち受けを自分の写真にしてるナルシストはいないかな? 今週もラジオ番組LOVEかわかみはじまるよー」

準

「パーソナリティーは2年のスキンヘッドの井上準」

百代

「人生、百花繚乱酒池肉林。3年の川神百代だ」

準

「いやー最近はさらに暖かくなってきましたね」

百代

「そうでもないな」

準

「話広げてくださいよ！　まあいいやメール読みます」

百代

「小さい子が好きな準さん病院行ってください”」

百代

「ははは、お前リスナーからも突っ込まれてるな」

準

「病院か。小児科なら喜んで」

百代

「次不当な発言したら骨外すぞ。2枚目のメール」

準

「2―Fの闘夜さんって好きな人はいるんですか？」

百代

「そんなのは自分で聞け〜と言いたところだが私としても気になるな」

準

「それは何故に？」

百代

「私の弟として誰に鼻の下を伸ばしているのか、普通は気になるところだろ」

百代

「それでは」

百代は携帯を片手に電話を掛けている」

準

「なかなかでないですね〜」

百代

「仕方ない。一度大和に聞いてみるか」

百代

「もしもし大和」

大和

「あー姉さん。闘夜なら見かけてないよ」

百代

「あいつ何処に行ったんだ？」

大和

「そういえばさっきキャップを探して一緒に昼寝してくるって言うてた」

大和

「ちょっと待って——なあ京今からキャップに」

京

「今電話したけど一緒にはいないって」

大和

「らしいよ。もう一度掛けるしかないね」

百代

「————もしもし？ やっと出たか」

???

「もゝしもゝし」

と出たのは眠たい声をした女の声である。

百代

「お前は誰だ？」

準

「おっとこれは意外な展開だ。見ず知らずの女の人が携帯にでたあ
」

闘夜

「ふあゝゝ」

隣からも眠たそうだがその声は聞き覚えのある声。

百代

「隣に闘夜がいるのか。かわれ」

???

「そんなに強く抱きつかないでよ。あーえーっと今はダメ。気持ちよさそうに寝てるから——ツブチ」

準

「あれ、切れてしまいましたね。これはいったいどういう状況なんですか？」

百代

「それはこっちが聞・き・た・い・っ・な」

準

「いってえー。誰か小児科を」

バキバキ——

すると井上 準の声が消えた。

——2—F——

岳人

「おい、どういうことだ。なんであいつ女といるんだよ。裏切り者めえ。約束してくれたのに俺が彼女作るまではって約束したのに」

卓也

「それじゃ闘夜はいつまでたっても——」

岳人

「おい、モロそれはどういうことだ。あん」

百代

「今日のラジオはここまでだ。今からちょっと闘夜を探してくる」

13話 気になるあいつの好きな人!! (後書き)

感想お願いします!!

14話 魔神の誤解!! 見知らぬ美人。見知った美人の恐怖!! (前書き)

更新遅れてごめんなさい。

14話 魔神の誤解!! 見知らぬ美人。見知った美人の恐怖!!

———河原

闘夜

「そろそろ帰ろうかな」

と、闘夜が立ち上がると・・・。

———ッガン!!!!!!

蹴られた。そして、寝転んだ状態に。でも誰が？

闘夜

「いってえ~~~~!!」

見上げると・・・!!!!!!

闘夜

「も、百代?!?! あのおく何を急に?」

百代

「そんな・と決まっ・るだろうが……」

あれ？ うまく聞き取れない

どうしたんだろ。まだ寝ぼけてるのかな？

あれ！？ これもしかして夢！！

闘夜

「なんだあゝ夢か」

そんなことを言って立ち上がる。

百代

「夢だと?! お前は——」

闘夜

「夢なんだから思う存分に好きな事ができるな」

百代に背を向けた瞬間、思いっきり蹴り飛ばされた。

闘夜

「ッいっ———たくない。全然」

うつ伏せ状態になっていると急に頭をなでられる。
ん？ どうしたんだ？ って、気にしてもしょうがないか。なんか地面なのに心地がいい。
しかも、いい匂いだ。

と、だんだん睡魔に制圧されていく。

おい、おい今は寝てる状態なのに夢の中でも寝たらどうなるんだ？？

そんなことを考えてる間に意識が遠くなっていた。

闘夜

「ん~~~~」

少し息苦しそうにして起きる。

???

「あれ~~~~眼が覚めたあ~~~~」

おっとりした感じでどこか眠たそうなにそんな事を言ってくる美人。
・・・俺に抱きついた状態で！！

闘夜

「夢の中で寝ると、また夢を見るのか？」

????

「かわいいなあゝもう」

周りの視線がやけに禍々しさを感じたので一度自分の頬をつねって
みた。

闘夜

「痛・・・い?!　っえ、どうして?」

それが事実だとわかると先ほどから抱きつかれて顔に当たる感触も
本物だと今気づく。

????

「んゝ眼が覚めたあゝ?」

闘夜

「うああ!」

抱きつかれたのを振り払い彼女を見降ろす。

闘夜

「あのおゝどちら様ですか?」

辰子

「辰子だよぉ」

いや、そんな事を言われても全然知らないから！！
なに？ そのなんか知り合いだったよ的な雰囲気は！！

闘夜

「知り合いでしたっけ？？」

辰子

「知らないよ。あまりにも君が気持ちよさそうに寝てるし、可愛かったからさぁ、
つい抱きついて寝ちゃったよぉ」

闘夜

「あはは」

と、笑うしかなかった。

辰子

「こんな、ところでなにやっていたの？」

闘夜

「それはどういう意味ですか？」

辰子

「だって、その制服って川神学園の生徒の人が着てるものでしょ？」

闘夜

「あーそれで。いや、天気もいいし絶好の昼寝日和だと思って」

辰子

「そうなんだあー。私もお散歩してたら、あまりにも君が気持ちよさそうに寝てるもんだからあー」

闘夜

「そうなんですか。でも、本当に気持ちいいですもんね」

闘夜

「普段からここに？」

辰子

「たまあーにだよ」

そんな話をしてるうちに、辰子が帰るねといって電話番号を交換した。

急に知らない美人と電話番号を交換できて上機嫌で
なんかまったりとしたような感じで誰もが和む^{なご}ようなそんなような
人と出会えたから嬉しかった・・・。

闘夜

「・・・最初に出会い方がおかしかったけどね」

闘夜

「そろそろ帰ろうかな」

と、闘夜が立ち上がると・・・。

———ッガン!!!!!!!!

蹴られた。そして、寝転んだ状態に。でも誰が？

闘夜

「いってえ~~~~!!」

見上げると・・・！！！！

闘夜

「も、百代?!?! あのおゝ何を急に?」

いや、待てよ。この展開どっかで体験したような??

・・・!! これって夢の続き?! ま、正夢か?!?!?

百代

「そんなこと決まってるだろうが!!」

いや、決まってるじゃないんですけど。

全然この状況を理解できないんですけどおおお。

闘夜

「っあ!! もしかして授業サボったから鉄心の爺さんに連れ戻して来いと。」

それでその代役が百代だったから怒っている。っていうこと?」

百代

「そんなことじゃない。なぜ、お前は私の連絡に出なかった?」

闘夜

「ん？　なにがそんな連絡・・・」

と言いながら携帯を取り出すと特に変化は無い。だから念のため履歴もチェックすると。

闘夜

「・・・あ！　百代から掛かってきたてた。ん？　でも俺、百代から掛かってきた憶えないし、第一俺眠ってたし・・・？！」

そういえば、俺、辰子ってさっき知り合った人と一緒に寝てたんだっけ。

ってことは、も、もしかして辰子さんが掛かってきた電話を出ちやったりしてた・・・んだよな、きっと！！

闘夜

「百代、誰かが出たり・・・した？」

百代

「ああ。そうだな。それでお前はそんな時何してた？」

闘夜

「だから、それはさっきも言ったように眠ってましたから。何があったなんて俺には分からないわけ・・・ッで！！！！ああ、えっと、ツゴホン」

百代

「ん！　なにか思い出したのか？」

闘夜

「いや、いや。何にも、そろそろ・・・」

百代

「ん、なになに女の子と一緒に寝てた。うん、うん。それで抱きついて寝てた、だと」

え？！　な、何でそのことまで知られてるの？

闘夜

「な、何言ってるっしや――――」

百代

「言い訳するとは最低な奴だな」

といって百代は俺の後ろにまわり首をがっちりとロックしてきた。そんでもってすぐさまに匂いを嗅いできた。

がっちり固定されて抱きつかれ至近距離でそんな事をしてくる。
背中に何か柔らかいものは当たるは百代の甘い感じの香りがプンプンしてくるはで、心臓の鼓動が爆発するんじゃないか？ ってくらいに脈が打つ。

百代

「なんだ？ この匂いは。これは完全にお前の匂いではないな」

闘夜

「・・・」

百代

「おい。聞いているのか？」

闘夜

「・あ・・あ、聞してるよ」

百代

「全然、聞いてないだろう・・・ツツが！！」

俺は頭の中が真っ白で、その後、ずーっと百代の寝技の猛攻で、なかば意識がとびかけていた。

百代

「今日はこのくらいで許してやる」

と言われ置いて行かれた。

S i d e 百代

ところで何だ。私は闘夜の所になんてしてきた？
私に内緒で女の奴といたからか？ 女と一緒にいた事で怒っていたのか？

百代

「私が？なにゆえに？ま、どうでもいいな」

てか、私は怒っているのか？・・・わけがわからんな。
・・・おもちゃをとられた気分だったな。

14話 魔神の誤解!! 見知らぬ美人。見知った美人の恐怖!! (後書き)

感想おねがいしますね!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4895p/>

真剣で魔神に恋してみる？！

2011年9月20日21時13分発行